

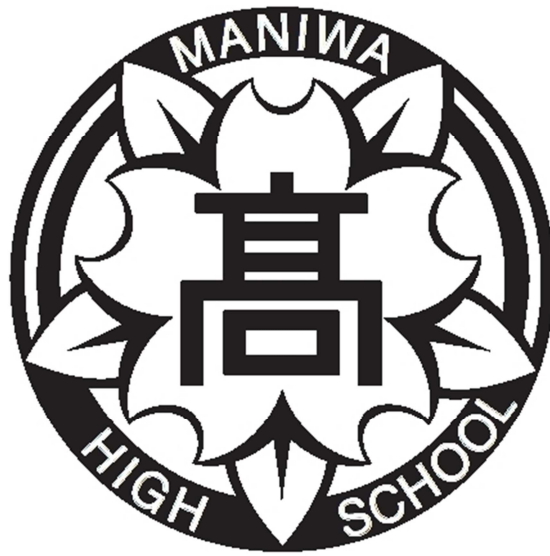
文部科学省指定

マイスター・ハイスクール事業

(次世代地域産業人材育成刷新事業)

最終成果報告書

(令和3年度～令和5年度指定)



岡山県立真庭高等学校

研究実施報告書目次

はじめに	1
ビジュアル資料	2
1 令和5年度実施計画	4
2 地域の概要	7
3 令和5年度実施概要	8
4 マイスター・ハイスクールビジョン	9
5 地域を担う人材育成カリキュラム	16
6 地域産業学習カリキュラム	22
7 地域資源を活用した学習カリキュラム	30
8 学校設定教科・科目の研究	31
9 真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動	32
10 活動を支援する体制の構築	32
11 取り組みの成果	34
12 課題と今後の取り組み	34

はじめに

岡山県立真庭高等学校

校長 豊田 涼

本校は、大正 13 年に創設された落合町他四箇村組合立落合実科高等女学校を源流に持つ落合高校と、昭和 21 年に創設された久世農林学院を源流に持つ久世高校とが、平成 23 年度に再編整備されてできた学校で、落合校地・久世校地を持つ 2 校地制で、農業・看護・普通科の 3 つの柱で教育活動を行ってきました。近年は、総合的な探究の時間「真庭トライ＆レポート」、「おかやま創生パワーアップ事業」等、様々な場面で地域の皆様の御協力をいただきながら、真庭地域をフィールドとする教育活動に力を注いできました。

令和 2 年度には「令和 10 年度を目途とする岡山県立高等学校教育体制整備実施計画」により 2 つの校地を落合校地へ統合することとなり、併せて、令和 4 年度には落合校地の普通科と久世校地の生物生産科・食品科学科の募集を停止し、落合校地に食農生産科・経営ビジネス科を新設しました。

時期を同じくして、令和 3 年度より文部科学省の「マイスター・ハイスクール事業」の指定を受け、『自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想－「環境（SDGs）」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－』という事業名で取り組んできました。

本事業では、真庭市の農産物を生産・加工・販売する 6 次産業化への学習を農商連携により展開するとともに、地域の農林業資源を活用した農業体験や観光プランの提案等を行うアグリビジネスプランの作成に取り組むことや、地域関連企業と連携し、新商品の開発・提案を行うとともに、模擬会社スタイルの学習展開の中で起業家教育を推進することを主な目標としています。この目標を実現するために、真庭市を中心に、銘建工業株式会社をはじめとする多くの企業や団体の皆様の協力を得て、新しい学習プログラムの開発等を行ってきました。また、真庭市からマイスター・ハイスクール CEO、銘建工業株式会社から産業実務家教員の計 2 名をお迎えし、地域の様々な資源を活用するシステムの構築及び最先端の技術・知識等の指導を担っていただきました。今後も、これまで以上に地域や産業界との連携を密にし、幅広い知識と行動力を持った若者の育成に取り組み、真庭地域で農業・商業・看護の学びができる高校として進化してまいりたいと考えています。

結びになりますが、本事業に伴い、御支援・御協力をいただきました皆様に感謝申し上げます。また、関係諸機関の皆様に本報告書を御高覧いただき、今後の本校の教育活動の充実・発展のため貴重な御意見や御助言をいただければ幸甚に存じます。

<ビジュアル資料>

自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想

－「環境（SDGs）」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－

■ 真庭高校マイスター・ハイスchoolビジョンとその展開

事業目標

■ 自然と共生し、持続可能な地域と地域産業を担う人材の育成

－真庭高校は、地域に受け継がれてきた自然や産業を生かして学ぶ中で他者とともに課題の発見や解決に取り組むことのできる力を育み、自らの生き方と地域や産業の未来を重ねて考えチャレンジする人材を育成します－

- I 農林業・商業のスキルを獲得することを目指し、地域産業と連携した学習を行います。
- II ビジネスプランの学習を通して、学科間連携を取り入れ、地域を学びのフィールドとした課題解決型の学習を行います。
- III 里山の豊かさを体感し、地域を愛する心の醸成を図るため、地域人材を活用した学習を行います。
- IV 地球環境や循環社会の学習として、真庭市が進めるバイオマスを学び、より実践的な活動に結びつけます。

- V 地域の保・幼・こども園及び小・中学校や住民と連携した地域貢献活動の充実を図り、地域課題の発見と解決に寄与します。

育てたい人材像

- 不透明で混沌とした社会を楽しく創造的に生きる意欲に満ちた人材
- 地域と地域産業の持続と発展を担う人材
- 6次産業化を推進する人材
- 地域資源を活用し、新たな価値を生み出す人材
- 地域に貢献する心や視点をもった人材

マイスター・ハイスchool運営委員会

- マイスター・ハイスchoolビジョンの策定
- 指標の策定
- 事業の検証と改善

改善策提起

意思決定

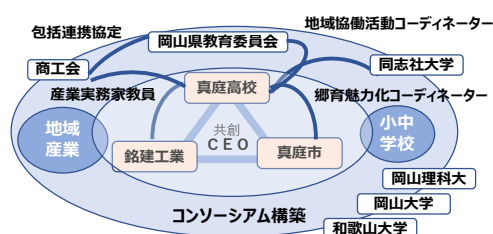
マイスター・ハイスchool推進委員会

- 教育課程の検討・決定・実施
- 校種間・地域産業との連携推進
- ※ CEOを真庭市から派遣
- ※ 産業実務家教員を銘建工業から派遣

進捗・課題

改革・助言

人材育成の構想



■ 育てたい人材像

自然と共生し、持続可能な地域と地域産業を担う人材の育成

真庭高校は、地域に受け継がれてきた自然や産業を生かして学ぶ中で、他者とともに課題の発見や解決に取り組むことのできる力を育み、自らの生き方と産業の未来を重ねて考えチャレンジする人材を育成する。

育てたい人材像

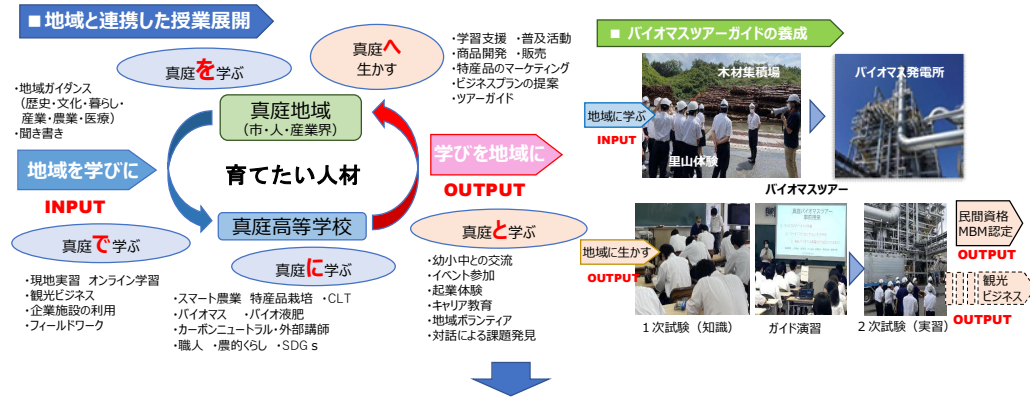
スキル・能力

- 地域資源を活用し新たな価値を生み出す人材
- 地域と地域産業の持続と発展を担う人材
- 6次産業化を推進する人材

意欲・考え方

- 不透明で混沌とした社会を楽しく創造的に生きる意欲に満ちた人材
- 地域に貢献する心や視点をもった人材

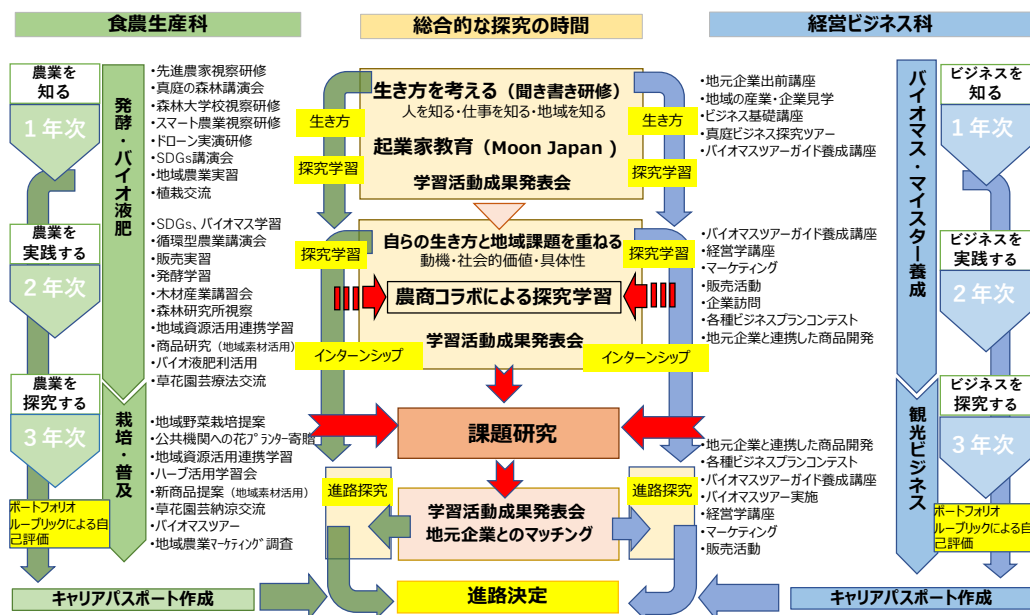
地域産業界との連携体制を構築し、新学科における真庭型産業人材育成プログラムを策定する。



真庭高校 真庭型産業人材育成プログラムの策定

- 専門科目だけの改革にしない ⇒ 学校運営協議会のバックアップ・校内体制整備 → 全職員の共通理解
- 地域との対話を起点とした授業実践 ⇒ 地域と語る会等の実施 (郷育魅力化コーディネーターの活用)
- 学科連携 ⇒ 総合的な探究の時間や課題研究での連携
- 地域・産業界との情報共有 ⇒ コミュニティアプリの制作 (同志社大学との連携)

■ 真庭高校 真庭型産業人材育成プログラム



1 令和5年度実施計画

(1) 管理機関

ア 管理機関（市区町村・都道府県）

ふりがな	まにわし
管理機関名	真庭市
代表者職名	市長
代表者氏名	太 田 昇

イ 管理機関（産業界）

ふりがな	めいけんこうぎょうかぶしきがいしゃ
管理機関名	銘建工業株式会社
代表者職名	代表取締役社長
代表者氏名	中 島 浩一郎

ウ 管理機関（学校設置者）

ふりがな	おかやまけんきょういくいいんかい
管理機関名	岡山県教育委員会
代表者職名	教育長
代表者氏名	鍵 本 芳 明

(2) 事業名

自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材育成構想

－「環境(SDGs)」×「アグリビジネス」⇒豊かな生き方・働き方－

(3) 事業概要

- ・ 中山間地域において自然と共生しながら持続可能な地域産業と地域を担う人を育むため、産業と教育に知見を有する真庭市職員をマイスター・ハイスクールCEO、銘建工業社員を産業実務家教員として真庭高校に配置するとともに、小中連携等に取り組む郷育魅力化コーディネーターの配置やコンソーシアムの構築により地域で高校教育を共創する。
- ・ 真庭高校において、真庭市の農産物を生産・加工・販売する6次産業化への学習を農商連携により展開するとともに、地域の農林業資源を活用した農業体験や観光プランの提案等を行うアグリビジネスプランの作成に取り組む。地域関連企業と連携し、新商品の開発・提案を行うとともに、模擬会社スタイルの学習展開の中で起業家教育を推進する。

(4) 令和5年度実施計画

① マイスター・ハイスクールビジョン【マイスター・ハイスクール運営委員会】

- ・マイスター・ハイスクールビジョンの進捗状況を管理するとともに、評価検証を行い、令和6年度からの自走に向けた体制構築についての議論及びビジョンの改善を行う。

② 地域を担う人材育成カリキュラム【マイスター・ハイスクール事業推進委員会】

- ・マイスター・ハイスクールビジョンに基づき、自らの生き方と持続可能な地域産業を重ねて考え、地域の担い手を育成するために必要な教育課程編成への提案や助言、また実効性を高めていくための連携提案等を行う。
- ・真庭高校での学びを小中学生に伝える交流学习の在り方を検討する。
- ・真庭高校と地域企業との連携について協議し、地域をフィールドとした学習展開の在り方を検討し、試行する。

③ 地域産業学習カリキュラム【CEO・産業実務家教員・真庭高校】

- ・令和4年度以降、環境と産業についての学びと地域産業及び地域での実習の場を、CEOを中心に検討し、産業実務家教員が課題研究等で真庭市の産業等を指導するとともに、実習先で体験的な指導を行っている。引き続き地域産業学習を進路指導に結び付けていくとともに、地域の担い手を育成するキャリア教育計画を決定・実施する。

④ 地域資源を活用した学習カリキュラム【CEO・真庭高校】

- ・令和4年度以降に食農生産科及び経営ビジネス科の全部又は一部の生徒に対して実施する、地域企業等と連携した取組内容を検討・実施するとともに、さらなる連携先や連携方法の検討を行う。
- ・令和3年度に計画した全学科で実施する総合的な探究の時間「真庭トライ＆レポート」で、テーマ『SDGs 未来杜市真庭～地域を学び、地域に学ぶ』を実施する。地域に出向き外部機関と積極的に協働して探究活動を深める。

⑤ 学校設定教科・科目の研究【マイスター・ハイスクール事業推進委員会】

- ・令和3年度に作成した真庭型産業人材育成プログラムをもとに、学科横断型学校設定教科・科目の内容と効果について検討し試行を行う。

⑥ 真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動【CEO・郷育魅力化コーディネーター・真庭高校】

- ・真庭市郷育魅力化コーディネーター・真庭高校による保・幼・こども園及び小・中学校との連携活動を実施する。
- ・真庭市郷育魅力化コーディネーターを中心として、教科・科目や総合的な探究の時間において、聞き書きの手法を取り入れた活動を実施する。

⑦ 活動を支援する体制の構築【管理機関】

- ・本事業に参画する個人・団体を広げるなど持続可能な推進体制構築を目指す。

(5) 令和5年度事業実施体制

意思決定機関の体制（マイスター・ハイスクール運営委員会）

氏 名	所 属 ・ 職
豊 田 涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中 島 浩一郎	銘建工業株式会社・代表取締役社長
太 田 昇	真庭市・市長
鍵 本 芳 明	岡山県教育委員会・教育長
大 月 隆 行	真庭商工会・会長
渡 辺 伸一郎	晴れの国岡山農協・真庭統括本部長
澁 澤 壽 一	NPO 法人共存の森ネットワーク・理事長
池 永 京 子	Maman 代表
中 村 妃佐子	株式会社 HAPPY FARM plus R・取締役

事業推進機関の体制（マイスター・ハイスクール事業推進委員会）

氏 名	所 属 ・ 職
平 田 勉	マイスター・ハイスクール CEO
豊 田 涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中 島 洋	銘建工業株式会社・総務人事部長
道 満 洋 和	（一社）真庭青年会議所・前理事長
三 村 伸 行	NPO 法人真庭あぐりガーデンプロジェクト・ゼネラルマネージャー
二 若 玉 基	真庭市産業観光部・産業政策課長
武 村 良 江	真庭市教育委員会・教育次長
室 貴由輝	岡山県教育庁・高校教育課高校魅力化推進室長
宮 阪 淳 司	岡山県立真庭高等学校久世校地・副校長
杉 山 俊 幸	岡山県立真庭高等学校落合校地・副校長
大 越 健太郎	銘建工業株式会社・小断面工場長（産業実務家教員）
吉 野 奈保子	真庭市郷育魅力化コーディネーター
大 岩 功	真庭市郷育魅力化コーディネーター
丸 山 敬 三	真庭支部中学校長会・会長

(6) 課題項目別実施期間

業務項目	実施日程（契約日～令和6年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①マイスター・ハイスクールビジョン					○					○		○
	○印 運営委員会			8月・11月進捗状況確認						評価・検証		
②地域を担う人材育成カリキュラム	←				◆				◆		◆	→
	◆印 事業推進委員会			交流学习、地域・産業界連携協議								
③地域産業学習カリキュラム	←					★						→
	銘建工業バイオマス学習・バイオマスマイスター養成講座・資格試験											
										検証・次年度計画		
④地域資源を活用した学習カリキュラム												
	真庭 TR 実施									→	★	
				★						真庭 TR 発表会		
				全国産業教育フェア発表								
	←				連携授業等実施						→	
										検証・次年度計画		
⑤学校設定教科・科目の研究					◆				◆		◆	
	(◆事業推進委員会開催時に検討)											
⑥真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携	←											→
	聞き書き講座、総合的な探究の時間の支援											
	市内探究ツアーのコーディネート、教育課程構築の検討、次年度交流学习計画											
⑦活動を支援する体制の構築				←		→				←		→
	協力企業アンケート						大学との連携（コミュニティ・アグリ）					

2 地域の概要

(1) 真庭市の概要

真庭高校の位置する真庭市は、豊かな自然に囲まれ、農林業、ジャージー牛などの畜産が盛んな地域であり、出雲街道の要所として古くから祭・温泉の観光や伝統工芸、酒や酢・味噌などの伝統産業の栄えた地域である。近年ではバイオマス、SDGsの先進地として、バイオマス発電やバイオ液肥を活用した農業促進、地域資源を観光に生かす観光地域づくりなど、市民とともにSDGs達成を目指す活動を展開している。

(2) 銘建工業株式会社の概要

銘建工業株式会社は、全国トップクラスの集成材事業を中核に、創業以来の国産材製材事業を含めて、主に住宅用木質構造材の供給を行っている。さらに製材工程で発生する木屑等を利用した木質バイオマス事業では、電力の販売や木質ペレットの製造販売を行っている。

3 令和5年度実施概要

令和5年度は、本事業で指定された「農：食農生産科」と「商：経営ビジネス科」が設置されて2年目であり、専門教科の教員数もまだ十分とは言えない状況であったが、CEO・産業実務家教員と専門教科教員を中心に、1年目から試行錯誤しながら取り組んだ学習展開と地域連携の取組を継続しつつ、マイスター・ハイスクールビジョンに沿い、新しい取組を交えて順次着手した。既存の学科においては、これまで培ってきた地域連携・地域貢献活動を継続して実施した。

(1) 管理機関による人的支援

事業名にもある「自然・社会・人との対話で育む真庭型産業人材」を育成するため、木質バイオマス産業で先端を行く地元企業銘建工業株式会社が管理機関として参画した。あわせて同社管理職社員を産業実務家教員として令和4年度から派遣した。

またもう一つの管理機関である岡山県教育委員会は、県下初となる産業実務家教員への特別免許状の発行や本事業を遂行するための助言を行うなど側面支援を行った。

代表管理機関を務める真庭市は、本事業を通じた新たなカリキュラム編成を主導するマイスター・ハイスクールCEOを1名任用し高校に配置するとともに、地域と高校をつなぐ郷育魅力化コーディネーターを任用し、探究的な学習の時間のサポートや「聞き書き」の導入促進を行った。またあわせて今後の自走化を見据え、庁内プロジェクトチームによるアクションプランの策定及び実施により高校連携を全庁的取り組みに引き上げ、産業及び地域振興を中心に各担当課が直接関わる関係性を構築した。

(2) 管理機関による財政支援

管理機関の代表である真庭市にとって、真庭高校は旧落合高校、旧久世高校の時代を含め地域産業の担い手として多くの産業人材を輩出してきたことから、同校の存続を持続可能な地域づくりを進める上で重要な課題と位置付け、市を挙げて財政支援することとしてきた。本事業は令和5年度で終了するが、本事業期間中に構築したカリキュラムがスタートする令和6年度以降においても、それまで培ったノウハウを生かし続けるため、高校と連携して継続した財政支援を行っていくこととしている。令和5年度は、地域から校内へ人材を招いたり、学校から地域へ学びに出て行く移動経費を確保したりするなど、地域連携に係るコストを負担する財政的支援を行った。

(3) 地域で支える体制づくり

自走化に向け、本事業に参画する個人・団体を広げ、コンソーシアムを構築することを目標として、その前段として地域づくり団体の構成員でもある若手事業者らを交えた小規模な「合同会議」を令和4年度は月1回ペースで開催し、地域で支える体制を作っていくための検討を重ねてきたが、令和5年度は新しい教育課程の構築に注力したため合同会議を公務関係者のみで実施した。当面は、令和6年度から学校に設置される学校運営協議会での関わりとともに、地域との緩やかなつながり（又は地域学校協働活動的な動き）に対する支援を引き続き行っていきたいと考えている。このような形を通じて学校運営方針を注視しつつ、将来的には意思ある団体・個人等の組織化を図ることを視野に入れていきたい。

「行きたい高校」「学びたい環境」としていくことは、地元進学率の向上はもとより地域が支える意義にもつながってくることから、高校内部での取組と合わせ、令和5年度は、地元ケーブルテレビの番組への生徒出演、市広報紙（広報まにわ）での特集、市ホームページ（VIVA まにわ）での紹介、市内小中学校・保護者が使用するアプリ（コドモン）への学校広報紙配信などの取組を行った。

4 マイスター・ハイスクールビジョン

(1) マイスター・ハイスクール運営委員会

運営委員会は別記1の委員により構成し、主に次の役割を担った。

- ① マイスター・ハイスクールビジョンの策定
- ② マイスター・ハイスクールCEOの選任
- ③ 産業実務家教員の選任
- ④ マイスター・ハイスクールビジョンの進捗管理及び指導助言等

運営委員会は、事業期間中に8度の会議を開催した（令和3年度に2回（うち1回は書面開催）、令和4年度に3回、令和5年度に3回）。令和5年度の実施概要は別記2のとおりである。

(別記1) 運営委員会名簿（当初委員の50音順）

氏 名	所 属 ・ 職
池 永 京 子	Maman 代表
太 田 昇	真庭市・市長（委員長）
大 月 隆 行	真庭商工会・会長
岡 田 茂 樹	晴れの国岡山農協・真庭統括本部常務理事
渡 辺 伸一郎 (R5. 4. 1～)	晴れの国岡山農協・真庭統括本部長
鍵 本 芳 明	岡山県教育委員会・教育長
澁 澤 壽 一	NPO 法人共存の森ネットワーク・理事長
豊 田 涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中 島 浩一郎	銘建工業株式会社・代表取締役社長
中 村 妃佐子	株式会社 HAPPY FARM plus R・取締役

(別記2) 運営委員会の実施概要

ア 第1回マイスター・ハイスクール運営委員会

- (ア) 日時：令和5年8月4日（金）18:30～20:50
- (イ) 会場：真庭市役所本庁舎 3階会議室
- (ウ) 議事：マイスター・ハイスクール事業進捗について
- a) 今年度の進捗状況等
 - b) 課題への対応（案）等

(エ) 議事概要（意見抜粋）

○高校生たちにとってどういう教育が一番ありがたいのかを考えると、一番は「人から」である。

「キャリアパスポート」を作る目的は自分の生き方を見つけることであり、そのためには人と会わせることが大切であり、さらにそのためには地域で子どもを育てるという意識になること。例えば羊羹づくりを見て「あれは格好よい」と思えるかどうかだ。そういう部分こそ一番の魅力となり得る。「地域丸ごと真庭高校」にできるかどうかは鍵だ。

○今は大変な時期であることは間違いない。ただマイスター・ハイスクール事業の理念にもあるように、これほど激しく変化する社会に対応できる人材を学校の中だけで育てることは無理がある。

「地元産業界と連携して作っていくのがこの事業である」と途中で感じるようになった。これだけ資源がある真庭であり、新しいやり方を企業や地域と作ることが大切。

○根本的なところで、生徒たちにこれからの可能性が感じられるような学びを提供したい。これを産業界にも農業界にも示してもらいたい。企業の努力を高校生に見せることも大切。

- 生徒自身が進みたいと思えるものでなければいけない。「環境だけ整えるので後はどうぞ」ではなく、企業とタイアップできることを見つけていくことが大切。ビジョンが明確になっている高校が選ばれやすいと思う。
- 0→1（ゼロイチ：新規事業などゼロから何かを生み出すことを指す造語）を生徒と語らせて欲しいというのが地域の願い。
- 企業連携について「簡単ではない」と言うのが現実だが、企業側も汗をかく姿を見せることの大切さを意識してほしい。学校現場に入れるような仕組みを考えてほしい。
- 先生方の熱意などももっと知る必要がある。教員とお互いを知り合う場面も必要ではないか。
- 産業界との協力関係について事務的な話で終わらず政策論的に進めていく。
- 真庭の挑戦を生徒に見せたい。

イ 第2回マイスター・ハイスクール運営委員会

（ア）日時：令和6年1月16日（火）18:00～20:00

（イ）会場：真庭市役所本庁舎 3階会議室

（ウ）議事等

- a 学科改編から、3学年完成に向けた取組の現状（報告）
- b 現状を踏まえ、課題解決に向けた方策
- c 真庭高校への志願者確保の方策

（エ）議事概要（意見抜粋）

- この事業を見ていて、方向性は一致しているはずなのにもったいないという感覚。もう少し単純な言葉に集約していけると、中学校や地域に対する強みになるのではないかな。
- 育てたい人材像としては、貢献意識よりも、自ら選択肢を集め、選択し、実行できる人材と考える。そういう人材でなければこれからの社会では活躍していけないと感じつつ、そういった人づくりに支援していきたい。真庭高校の「らしさ」をきちんとつくって、そこにつながる体制や取り組みを作っていけたらと思う。
- 「キャリアパスポート」は最後のところだけを見るのではなく、生徒が高校時代から将来へ向けての選択肢を増やすことが目的だ。これには情報やファシリテートが肝要であり、できれば中学から継続してサポートしていくことが望ましい。
- 現状、中学生からそういう体系になっている。
- 真庭高校が普通科高校から専門高校に変わっていく中でどういう柱を立てていくかを考えていくための会議であったはずで、2年間携わっているが、未だに柱が定まっていないと感じる。
- どこまで生徒の声を聞いているのか。「生徒の声を聞く」と「やりたいこと」、「講師（教員）」、「進路先」が大きな要素と感じる。
- アルバイトはぜひやってもらいたい。収入もだが、自ら稼ぐことをデザインすることが大切。
- 校内ルールの見直しの検討に入っている。
- 子どもたちの声という発言について。子どもたちのニーズももちろん大切だが「何を学んで、何に繋がっているのか」を生徒自身が語れるようになっていくかという視点も大切。ニーズを聞くと当然たくさんの意見が出てくる。それに流されるのではなく、育てたい人材像に対して、私たち自身がその姿勢で生きているのか、活動しているのか、発言しているのか、が求められていると感じている。学科連携の話もあったが、世の中は全て繋がっているという話を、押し付けていくというと言語弊があるが、背中を見せないと伝わらないと感じている。
- 第3回では決定事項をオープンにする会議を開催する。

ウ 第3回マイスター・ハイスクール運営委員会

(ア) 日時：令和6年3月19日（火）17:00～18:30

(イ) 会場：真庭市役所本庁舎 3階会議室

(ウ) 議事等

a 3年間のまとめ

b 第2回運営委員会で提示された課題への対応

○マイスター・ハイスクールに、全校を挙げて取り組むことの表明

①真庭高校の学校運営基本方針にマイスター・ハイスクールの考え方が取り入れられること。

②学校運営基本方針を着実に実行するための校内推進体制

③真庭型産業人材育成プログラムの学校正式方針化

(エ) 議事概要（意見抜粋）

○来年度以降の運営方針については、マイスター・ハイスクールの考え方を踏まえ、スクール・ミッションをもとに学校経営の方針を定め、学校全体におろしていく。このスクール・ミッションに本事業で進めてきた企業等との連携や、育てたい人材像が含まれており、これを基に学校運営を進める。

○学校運営協議会の委員についてはすでに候補者と調整中であり、広く地域の声を拾い、学校運営に反映させていきたい。

○カリキュラムについては、株式会社 Moon Japan の事業と聞き書きのグループ編成など調整中のものもあるが、速やかに検討し、2年生で探究からインターンにつないで発表。3年生は進路学習を中心に1・2年生で培ってきたものを課題研究で探究し、発表していく流れ。

○校内推進体制については、定期的に企画会議を開き、浸透させていく。

○地域連携については主幹教諭か指導教諭を充てる地域連携担当教員を設置し、TR担当者、学年団担当者、地域連携担当者、郷育魅力化コーディネーターで地域連携学習推進チームを構成。また真庭市との合同会議も継続させていく。

○大学との連携により開発中のコミュニティ・アプリを使い、地域や商工会とも連携していく。

○1年生で聞き書きなどにより社会課題を見つけるところから、2年生で生徒自身がテーマを設定できたらよいのではないかと。そして3年生に進学対策という言葉が多過ぎるのではないかと。もう少し進路を探究する時間があったとしてもよいと感じる。また、地域連携体制ができるのはよいが、企画会議に通さないと動けないのか少し懸念がある。

→推進体制について、最終的な機関としては職員会議になるが、毎週1回の企画会議を通すことで動くことはでき、比較的動きやすい形である。またチームでの協議に加え学科ごとの動きもある。

○地元の基礎自治体との連携に苦慮する学校が多い中、当初から市長以下基礎自治体のコミットがあったことは特筆。環境・地域資源が整っている面では群を抜いていた。一方で、基礎自治体と学校の関係性の面では「一枚岩」に至れていなかったことは否定できない。

○今までと異なる、真庭で生きる、違う生き方を見つけるという生徒を育成していく場としてスタートラインに立ち、一步を踏み出せた。今後は先生方と保護者の変化、「外へ行けなかったから残る」ではなく「ここで生きたいから残る」に変えていかなければならない。

○発表で「真庭に、真庭で、真庭を…」と連呼されていた。真庭で生まれた以上は真庭のことを好きになってもらいたいのは小・中も同じだが、特に自分の意思で決める第1段階である15歳のときに、「真庭で」「真庭に」…が叶う学校になったらよいと感じた。

○「卒業生が出ていないから…」という意見に対しては、「今」を伝える責任があると言いたい。「どう育てたいか」は今でも伝えられる。素晴らしい資源があったが、学校が一つになって知恵を出し合え

たか、全体で達成感があったかという残念な思いもある。

○現実的な状況下で、「真庭に行けばこれができる」と思ってもらえるようにしたい。大人の価値観を変えることも含め、真庭高校だけの話題にせず、取り組んでいきたい。

(2) マイスター・ハイスクールビジョンの進捗・評価

マイスター・ハイスクールビジョンは次の5項目を設定し、地域と協働しての魅力ある学習を展開することを目標に取り組んだ。

I 農林業・商業のスキルを獲得することを目指し、地域産業と連携した学習を行います。

- 地域の特産品の栽培技術を学び、その普及のための地域の先端農家と連携
- 特産品のマーケティング学習
- 産業界と連携したキャリア教育
- スマート農業の知識・技術を学び、専門スキルを習得

II ビジネスプランの学習を通して、学科間連携を取り入れ、地域を学びのフィールドとした課題解決型の学習を行います。

- 地域の特産品を使った商品開発とビジネスプランの提案
- 地域の産業や環境を生かした観光ビジネスの学習
- ビジネスプランを基にしたビジネスコンテストへの挑戦
- 地域産業との協働による起業体験

III 里山の豊かさを体感し、地域を愛する心の醸成を図るため、地域人材を活用した学習を行います。

- 地域人材から学ぶ「聞き書き」
- 地域をフィールドとした研修（実地・オンライン）
- 地域・産業界などの人材を外部講師として活用
- 地域活動、地域ボランティアなどへ参加・企画・運営

IV 地球環境や循環社会の学習として、真庭市が進めるバイオマスを学び、より実践的な活動に結びつけます。

- 銘建工業等での実習を踏まえた林業バイオマス学習
- バイオ液肥の利用方法の研究・利用実践と普及活動
- カーボンニュートラル、環境負荷低減の取組と経営の学習
- SDGs を題材とした探究学習

V 地域の保・幼・こども園及び小・中学校や住民と連携した地域貢献活動の充実を図り、地域課題の発見と解決に寄与します。

- 校種を超えた交流学习や体験学習の支援
- 地域への農業技術普及や販売学習
- 地域住民との対話による課題発見と課題解決の協働
- 提案による社会教育の場づくりや市が行う取組への積極的な参加

それぞれの項目についての進捗・評価については、次のとおりである。

I 農林業・商業のスキル獲得・地域産業との連携学習

先進技術の学習については、食農生産科1年で、自動草刈り機やGPS搭載のトラクターなどが活躍する先進農家を訪問した。生徒は、作業の効率化だけでなく、農業が地域の景色を作っていることも知ることができた。農業用ドローンの実演見学や操作演習にも意欲をもって取り組み、農業大学の講義ではスマート農業のメリットだけでなく、デメリットについても学んだ。

CLT（直交集成板）は真庭市内で製造・加工する企業があり、真庭市を支える産業の一つである。その企業から派遣された産業実務家教員の授業では、木造でも高層建築を可能にするCLTのすばらしさについて学ぶとともに、食農生産科の課題研究でCLTを用いてベンチを制作し、市の協力の下にバス停等に設置した。多くの方に利用され、生徒たちはやりがいを感じることができた。

また、Ⅲのとおり地域人材の活用を通じて、地域産業と連携した教育・学習を行うことができた。

II ビジネスプランの学習・地域を学びのフィールドとした課題解決型学習

令和5年度は経営ビジネス科2年で地域資源を生かした商品開発に取り組んだ。生徒はいきおい独りよがりな発想になりがちであるが、市産業政策課職員によるリサーチ講座等を通じて、生徒たちは自らの考えを補正しながらアイデアを多角的に検討し、ブラッシュアップさせながら、地元企業の方からもアドバイスをもらい、商品化を目指し、試作を重ね、令和6年2月には試作品の完成に至った。すでに梨を使ったスムージーが商品化されている。

ビジネスプラン学習については、経営ビジネス科2年生全員が岡山イノベーションコンテストに挑戦し、そのうち2チームが2次審査に進出した。

起業体験については、経営ビジネス科のみならず食農生産科からも参加可能とし、新しいタイプのインターンシップであるCultivate the future maniwaに課外活動として参加した。これは都市部企業と真庭市内の企業をマッチングさせ、0→1のアイデア創出から新規事業を立ち上げるまでを高校生が伴走し、プレゼン発表までを行った。生徒たちが新たな価値を見出す視点を持つことができ、起業のハードルが下がることを期待している。

観光ビジネスについては、Ⅳのとおりバイオマスツアーガイド養成を実施したが、今後大学との連携等によりまだまだ可能性の広がる分野と捉えており、引き続き取り組んでいきたい。

ビジネスプラン学習については、5項目のうちでⅣの次に特色化できた取組と考えているが、学科間連携の余地のある中で比較的経営ビジネス科寄りの取組となっており、引き続き学科間連携の充実に向けて取り組んでいきたい。

III 地域人材活用学習

外部講師の活用や地域をフィールドとした学習については、令和4年度から経営ビジネス科1年が「ビジネス探究ツアー」と呼ぶ学習を行った。郷育魅力化コーディネーターや地域協働活動推進員との協力でコースを編成し、単に施設を巡ることが目的ではなく、人に会い、生き方を考えることを目的として実施した。

地域の方々の地域を想う話が生徒たちの心を動かしたようで、生徒のツアー後の感想には自分たちも地域のために力を尽くしたいという思いにあふれ、手応えが感じられた。ところが、次年度の1年生の感想には上滑り感があるなど、これらの学習において、指導する先生の意識や振り返りの重要性を感じるところである。

また「地元企業出前講座」と呼ぶ学習では、7異業種8社から外部講師を招き、話を聞き、生徒は仕

事の違いを知るだけでなく、異なる課題に向き合い、様々に工夫していることを学ぶことができた。ただし、講義形式の授業ではモチベーションが維持できない生徒も多く、授業を対話型にするなどの工夫が必要と感じられた。

人に会い、話を聞き、文章にしたためることで自らの生き方、働き方を考えるに当たり有効とされる「聞き書き」の取組については、令和5年度においては総合的な探究の時間を活用して行うメニューの一つに位置づけられていたが、十分な取組に至っておらず、引き続き検討していきたい。

Ⅳ 循環型学習・林業バイオマス学習

真庭市の進める循環型社会や林業バイオマスの学習については、地域を自分の言葉で語れる生徒にしたいという狙いも持ち、令和5年度経営ビジネス科で、産業実務家教員の協力を得てバイオマスツアーガイドの養成を授業化した。ガイド養成という一見知識を詰め込む学習と思われるが、そうではなく、観光局のスタッフからお客様をガイドする上での失敗談や難しさ、喜び、やりがいを語ってもらい、お客様への目配り気配りも含め、ガイドの原稿も自分で作り、学習した。最初は消極的だった生徒も、ガイドをやり終えると、達成感を感じ、自信を持つに至った。結果、初年度は7名が観光局からガイド資格である真庭バイオマスマイスター（通称MBM）の認定を受けた。

今後、経営ビジネス科では、バイオマスツアーをガイド養成や観光プランづくりの学習（3年生）につなげていきたい。MBMの認定を受けた上級生が下級生に向けてアウトプットすることで学びが循環できるような工夫や、地元敬老会や子供会のガイド等、実践の場を広げていきたいと考えている。

このバイオマス学習を通じたバイオマスマイスター養成は、5項目のうちで特に特色化できたと考えている。

現在は経営ビジネス科のみの取組となっているが、食農生産科においても、真庭市の取り組む「循環型社会」をテーマに、発酵やバイオ液肥の普及についてもう一つのMBM認定に向けた授業構成ができないか引き続き検討している。

Ⅴ 地域貢献活動の充実

地域貢献活動については、地域の依頼を受け、生徒が考えたデザインで耕作放棄地に花の苗を移植し、景観保全に貢献したほか、植栽交流や収穫イベントも行った。地域の方々からも感謝され、生徒たちの自己肯定感も高まる結果となった。

地域のイベントについては、令和5年度、市内きたまちマルシェ等に参加し、地域交流を行った。販売活動や接客のよい実践の場となった。生徒たちは、お客様の反応から、販売形態をワークショップに変えるなど柔軟な対応をとったところ、好評裏のうちに終わり、単なる販売よりもコミュニケーション力が発揮され、進んで働く生徒の姿に大きな成長が感じられた。

また、（一社）真庭観光局の依頼を受け、TV番組の制作協力も行った。真庭の寺院を巡り、見どころを聞きながら御朱印を頂くという番組であるが、生徒は、静寂な境内・お香の香り・宗派で異なる本尊など、お寺の魅力と番組制作の生の現場を体験し、収録が終わるころには、地域に貢献できる番組をつくってみたいなど意欲を口にしていた。

今後は、依頼による受け身の活動だけではなく、生徒が地域と語り合う中で、課題を見つけ解決に努めるという展開ができるような方策も検討する必要がある。

（3）教育課程の構築

マイスター・ハイスクールビジョンに基づき、事業推進委員会等での協議を踏まえ、上記のような取組を整理、体系化し、3年間を通した真庭高校の学びとして第6で示すこととする。一例を挙げると、

食農生産科の特色ある学びとしては、発酵やバイオ液肥の学習、地域で展開する総合実習など、経営ビジネス科の特色ある学びとしては、バイオマスツアーガイドの養成を含めた観光ビジネスの学習、企業と連携した商品開発、ビジネスプランづくりに力を入れていく。

これが教育課程等の概要であるが、これらを教科・科目の学習に落とし込み、具体的な教育課程表を形成する。

詳細は第7で示すが、これらに加えて総合的な探究の時間（真庭高校ではT R（真庭トライ＆リポート）と呼称する。）等を活用し、自らの生き方、働き方を考え、学ぶとともに、学科連携を通してより幅広く考察し、知識、経験を得ることで、育てたい人材像へ近づけていきたいと考えている。

事業期間中検討、構築してきた専門科の学びと、T Rや学科連携とを結び付ける取組は道半ばであり、有効な方策を引き続き検討していきたい。

5 地域を担う人材育成カリキュラム

(1) マイスター・ハイスクール事業推進委員会

事業推進委員会は別記1の委員により構成し、運営委員会が策定したマイスター・ハイスクールビジョンに基づき、事業実施に当たるとともに、教育課程の刷新の方向性について検討、決定に向けた協議を主に実施した。

事業推進委員会は、事業期間中に7度の会議を開催した（令和3年度に1回、令和4年度に3回、令和5年度に3回）。令和5年度の実施概要は別記2のとおりである。

(別記1) 事業推進委員会名簿（当初委員の50音順）

氏 名	所 属 ・ 職
赤 田 憲 昭 安 藤 紀 子 (R4. 4. 1～) 武 村 良 江 (R5. 4. 1～)	真庭市教育委員会・教育次長
大 岩 功	一般社団法人はにわの森・代表（真庭市郷育魅力化コーディネーター）
大 越 健太郎	銘建工業株式会社・小断面工場長（産業実務家教員）
杉 山 俊 幸 宮 阪 淳 司 (R5. 4. 1～)	岡山県立真庭高等学校久世校地・副校長
武 村 克 彦 吉 原 啓 之 (R4. 4. 1～) 杉 山 俊 幸 (R5. 4. 1～)	岡山県立真庭高等学校落合校地・副校長
道 満 洋 和	岡山県商工会青年部連合会・理事
豊 田 涼	岡山県立真庭高等学校・校長
中 島 洋	銘建工業株式会社・総務人事部長
平 田 勉	マイスター・ハイスクール CEO
牧 邦 憲 二 若 玉 基 (R5. 4. 1～)	真庭市産業観光部・産業政策課長
三 村 公 一 丸 山 敬 三 (R5. 4. 1～)	真庭支部中学校長会・会長
三 村 伸 行	NP0 法人真庭めぐりガーデンプロジェクト・ゼネラルマネージャー
室 貴由輝	岡山県教育庁・高校教育課高校魅力化推進室長
吉 野 奈保子	NP0 法人共存の森ネットワーク・事務局長（真庭市郷育魅力化コーディネーター）

(別記2) 事業推進委員会の実施概要

ア 第1回マイスター・ハイスクール事業推進委員会

(ア) 日時：令和5年8月1日（火）10:00～12:00

(イ) 会場：場所：真庭高校落合校地 3階会議室

(ウ) 議事等

a マイスター・ハイスクール事業進捗について

a) 今年度の進捗状況等

b) 課題への対応（案）等

b 持続可能な体制の構築について

(エ) 議事概要(意見抜粋)

- コミュニケーション能力は農業やビジネスの現場でも大切であり、今後のカリキュラムを考える中で考慮が必要。
- 経営ビジネス科は2年生の通年で商品開発、販売をやっていければ、真庭高校の魅力にもなるし、大切にしていきたいところ。高校が何をしたいかが分かれば、誰が何をどう補完するかが見えてくる。
- 考えが至っていないこととしてTRがある。TRが1年からどうステップアップしていくか、そして2科の関係性にどう混ざり込んでいくのか見えない。
- バイオマスツアーガイド養成講座については、教育課程として何を大事にすべきか、知識を得ることなのか、ガイドを輩出することなのか、その他のことなのかはまだ見えていない。とても良い取組ではあるが、最終的に生徒たちの力をどう育むのかを明確にしないと、カリキュラムと言いついて切れないのではないかな。
- 課題を知るにせよコミュニケーション能力の育成にせよ対話の場面が多いに越したことはない。地域の情報を集めて先生を通して流してきたが、生徒が直接対面してやりとりする場は授業の中に組み込めていない。今のTRは学校がテーマを提示した中から生徒が選び6つのグループに分かれ事業を行っているが、企業側の「0→1で関わりたかった」という声には応えられていない。先生方は、まず教科書で学んで、その後に課題と思ったことを挙げるという方式である。ことの運び方が、地域の思いと先生方のやり方とマッチしていない。
- 教員の性として教えたがる面があるが、意図的に「ファシリテーター」あるいは「ジェネレーター」として、時に「議論に入って」「生み出す」力が大事。高校でいきなりコミュニケーション能力をつけるのは難しい。
- 農商のコラボこそTRがふさわしいのではないかな。今でこそ社会では分業制が一般的だが、地方は違っていいと思う。学びを共有し合うことがコミュニケーションそのものにもなる。

イ 第2回マイスター・ハイスクール事業推進委員会

(ア) 日時：令和5年11月27日(月) 9:30~11:30

(イ) 会場：真庭高校落合校地 3階会議室

(ウ) 議事等

- a 真庭高校への志願者確保の方策
- b 学科改編から、3学年完成に向けた取組の実施状況
- c 来年度の推進体制

(エ) 議事概要(意見抜粋)

- 発酵とバイオ液肥の扱いが課題。食農生産科であれば食べ物、経営ビジネス科であればバイオマスというのが特色の柱になる。これを探究の時間でどう繋いでいくか。
- 1年生は課題を見つけ、生き方を考える。2年生でグループを組み替え、3年生で価値あるものの課題研究につなげるという考え方でどうかと思う。
- 真庭市で推進している郷育の先に、真庭高校の教育課程がダイレクトにつながればよいと思う。真庭高校でないと学べない、と思う生徒が増えるように。郷育を通じて、目的を持って真庭高校に進んで、そこでウェルビーイングをつかめる生徒になってほしい。
- 考え方や取組を、いかに中学生、保護者に発信していくのか。
- HP(まにこうブログ)、フェイスブック、YouTubeで発信しているが、見に来てくれないと見てもらえない類いのもの。受け身なのが課題。

○本事業を経て、生徒の変容が感じられているか。

→成長度は大きいと感じている。入学したての頃は何もしたくない、コミュニケーションを取りたくないと言っていた生徒たちが、行動力が身についたと生徒の口から出てきた。

○真庭にはもっと企業がある。仕事を含め社会勉強をして、選択の幅を広げてほしい。

○3年目にプログラムを作ることが一つのゴールだとは思いますが、どう継続していくのか。

→資料に記載している内容は多いため取捨選択することはあると思うが、柱にしてやっていきたい。市の協力も得ながら、地域の声を聞いていきたい。

○次の事項について、整理と役割分担をどうするかを考えてほしい。

- ・普通教科の教員を含め、学校全体で取り組むことができているか。

- ・地域への就職にどう結びつけるか。

○令和6年度以降の推進体制について、CEOや産業実務家教員の県費対応は困難であり、市教委でコーディネーターの配置が可能かどうか協議している。教員数は、食農生産科と経営ビジネス科が完成年度で増員が想定される。また、来年度から学校運営協議会の設置の方向である。今度はマイスターだけでなく看護も考えていかなければならない。マイスター・ハイスクール事業の柱は引き継いでいきたい。

○中学校の生徒・保護者もそうだが、教員に訴えることが大切だと思っている。中学校と高校の先生が交流できる場がないのが課題。

○情報発信については、コドモン（市内小中学校・保護者の連絡アプリ）活用が有効。

○校内での共通理解がもっとあるべき。

ウ 第3回マイスター・ハイスクール事業推進委員会

（ア）日時：令和6年2月14日（水）17:30～20:30

（イ）会場：銘建工業株式会社本社 2階会議室

（ウ）議事等

a 3年間のまとめ

b 第2回運営委員会（1/16）で提示された課題への対応

a) マイスター・ハイスクールに、全校を挙げて取り組むことの表明

i) 真庭高校の学校運営基本方針にマイスター・ハイスクールの考え方が取り入れられること。

- ・「真庭流マイスター・ハイスクール」としての分かりやすいメッセージ

- ・学校運営協議会による学校運営基本方針の承認、学校教育活動への意見申し出、進捗確認の担保等

ii) 学校運営基本方針を着実に実行するための校内推進体制

- ・全学科・全教科を挙げた体制整備とその浸透を図ること。

iii) 真庭型産業人材育成プログラムの学校正式方針化

- ・TRと学科連携の行方について

b) 農業実習地の対応（ハッピーファームとの契約等）

c 学科の先生方から地域の方へ

d 市による令和6年度支援予定内容

e その他

- ・コミュニティ・アプリの進捗状況

- ・今年度会議等、行事予定等

(エ) 議事概要（意見抜粋）

- 真庭高校の学校運営方針として、マイスターの考え（地域をフィールドとした学習展開）を継続する。3月中に練り、学校運営の基本方針として年度当初職員に伝達し、推進する。また、真庭市や地域との連携については、現在行われている「合同会議」を継続する。
- 真庭高校の方針を表すメッセージ的なものを考えるべきとの意見については、教員や生徒の意識を上げていく意味でも、現場からの提案を吸い上げてきたい。
- 学校運営協議会の委員構成（案）については、学校教育寄りと感じたが、農業・商業を起点にしていく中では、そちら寄りも含めた多角的視点が必要ではないか。
- 学校の魅力を打ち出していくターゲットは「保護者」でよいと思う。様々なステークホルダーがいるのは確かだが、幅広に考えたらありきたりなものになってしまうため。
- 地域連携学習推進チーム（案）について、全員集まることは困難とのことだが、そこが一番大切ではないか。
- 実情としては、校内で同時にこれだけの人が集まることは難しい。全体共有は何らかの方法で図るとして、スピード感を出そうとすると部会制が現実的と思っている。
- TRの動きの遅れが不安視されているが、TRの進め方については、進路指導課で原案を作り、学科・学年から意見を募るなど全教員が関わって行っている。1年間取り組んできた教員からの声や発想を取りまとめていかなければならない。
- マイスター・ハイスクール事業が学校全体の動き、各課、教科、先生方に到達していないことが大きな課題として認識される。
- 「地域のため」の言葉をぼやかして使うとメッセージ性が消える。「地域」の解像度をあげ、「誰のために」が見えるようになると、生徒が考える先の打ち手になっていくと思う。本事業によって見えてきたと思うのでより解像度を上げてほしい。
- これまでと同じことをしていたら人は来ない。県南は周辺環境を含め人を呼べる状況にあるが、県北はそうはいかない。そういう中で人を呼ぶことができる街にあって、それをいかに教育と結びつけるか、それが真庭高校の今後のヒントだと思う。
- 真庭高校はどういう学校かと問われて先生方はうまく言えないようだが、ここで出た視点や報告の中にその要素がたくさん詰まっている。後はこれをどう表現して、伝えるのか。
- 高校という世界では時間もかかるし「やってみよう」だけでは進まないことも感じた。この会は終わるが、一方で「終わらせない」ことも大切。今後も関係者が距離をより近くして取り組んでいく必要があり、そういう意味では本事業でつながりが深まった。
- 学校運営協議会の動きに合わせ、地域学校協働活動の動きも取り入れながら考えてもらいたい。教員だけが教える学校ではないという意見は、看護科もまさに同じ。

(2) 教育課程編成への提案・助言等

・教育課程編成への提案・助言

地域との連携、交流については、落合校地では普通科のＴＲであったり、久世校地では農業系学科の取組であったり、それぞれが年月を重ね積み上げてきた実績があったが、課外活動に位置づけられるもの、課程内の学習として行われていたもの、単発のイベントものなど様々であり、特に学科改編後の３年間を通した学びの中での体系化や、地域での印象度の面で弱みがあった。

また、経営ビジネス科は新設学科であり、まさにゼロからのスタートであった。そのような中で、事業推進委員でもあるＣＥＯや郷育魅力化コーディネーターの助力を得て、管理機関や担当教員で構成した合同会議や担当者会議で作業を行った。まずはそれぞれ単発の事業等が教育課程のどこに位置付けられるかの整理を行ったのち、その意義・位置付けを再確認しながら、教育課程への落とし込みと体系化を行いつつ、３年間の学びの姿を形作り、学科の特色を見出す作業を行い、後記「６ 地域産業学習カリキュラム」で示すとおり３年間の学びの体系表を作成した。

両科とも、まず教育課程内で実施すること、課外活動で実施することを位置づけ、課程内で行うことについては、①学科の学習に必要なベースとなる知識、技術や、②探究的な学びを踏まえ、③特色ある学びを位置づけた。

食農生産科の特色ある学びとしては、発酵やバイオ液肥の学習、地域で展開する総合実習など、経営ビジネス科の特色ある学びとしては、バイオマスツアーガイドの養成を含めた観光ビジネスの学習、企業と連携した商品開発、ビジネスプランづくりに力を入れることとしている。

学校行事・課外活動は、授業時間数や参画人数の関係で課外の位置づけであるが、発展的な取組として特色を見出すことができると考えている。

両科とも「知る、実践する、探究する」のサイクルで３年間の学びが構築されるが、食農生産科ではそのサイクルを学年毎に回しつつ上位学年につなげていく「スパイラル型」、経営ビジネス科ではそのサイクルを学年順に進めていく「右肩上がり型」というイメージで構築している。

両学科は令和６年度に完成年度を迎える。まずはこのように形作られてきた学科の学びをしっかりと実践していきたい。一方で、学科の学びとＴＲや学科連携とを結びつけることは、真庭高校ならではの教育の特色をより打ち出せる有効な取組と考えられるものの道半ばであり、有効な方策を引き続き検討していきたい。

(3) 真庭高校での学びを小中学生に伝える交流学習の在り方

・小学校やこども園との植栽交流

地域の依頼を受け、生徒が考えたデザインで耕作放棄地に花の苗を移植し、景観保全に貢献した。また、植栽交流や収穫イベントも行った。地域の方々からも感謝され、生徒たちの自己肯定感も高まった取組となった。

・真庭組子の取組の伝承

課題研究の授業がきっかけで、飛鳥時代から続く日本の伝統技術である「組子」に興味を持った令和5年度食農生産科・経営ビジネス科の生徒5名が、市内企業が請け負った、令和6年に地元岡山で開催される全国植樹祭の式典会場に整備する御座所の背面組子壁の制作に協働した。

組子を学んだことで地域への誇りと自信をもった生徒は、県北11団体が参加するフォーラムなどで、地域活性化につながる取組としてこの実践を発表した。

その後、5人は組子のすばらしさと技をクラスに伝え、クラス全員で、地元の小学校2校に出前授業を行った。自らの学びのみならず、それを大きく広げる展開ができた。

・交流学习の在り方

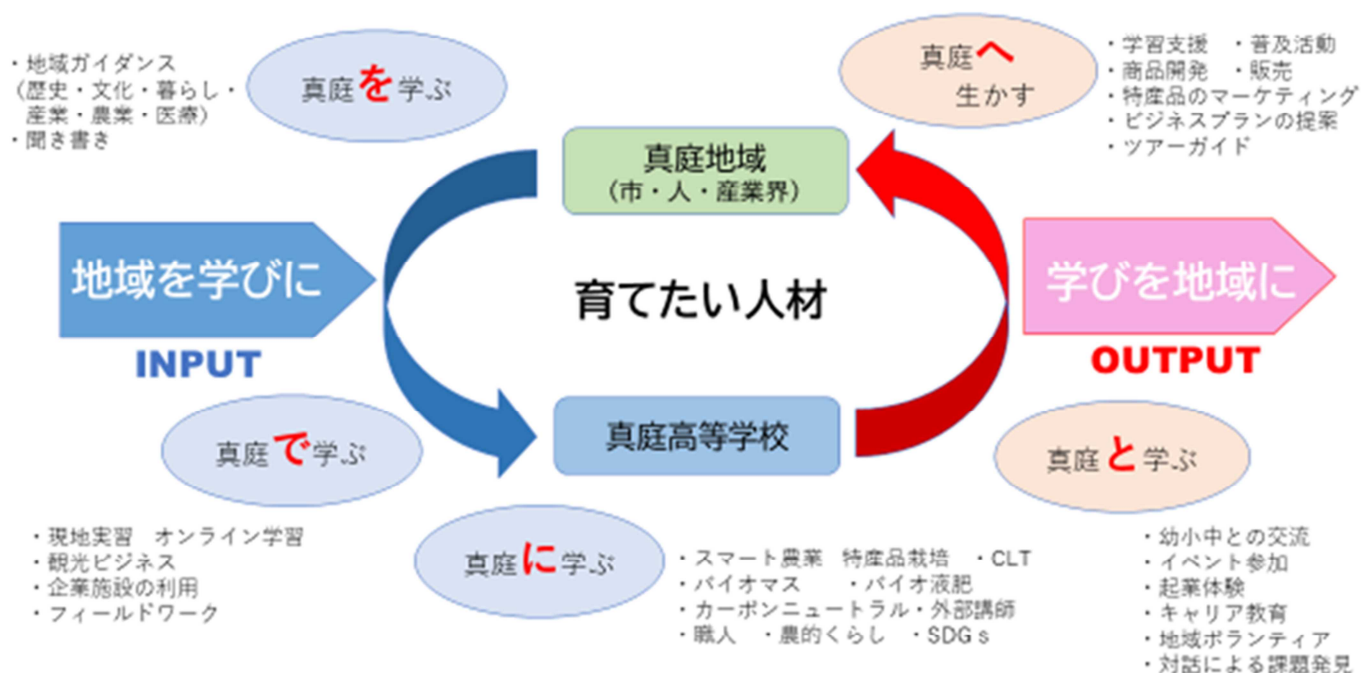
今後は、依頼による受け身の活動だけではなく、生徒が地域と語り合う中で、課題を見つけ解決に努めるという展開ができるような方策も検討する必要がある。また、小学校との植栽交流や出前授業などで小学校やこども園と連携した取組は実施することができたが、中学校との関わり方については、引き続き検討・改善の余地があると考えている。

(4) 真庭高校と地域企業等との連携・地域をフィールドとした学習展開の在り方

・地域をフィールドとした学習展開の在り方

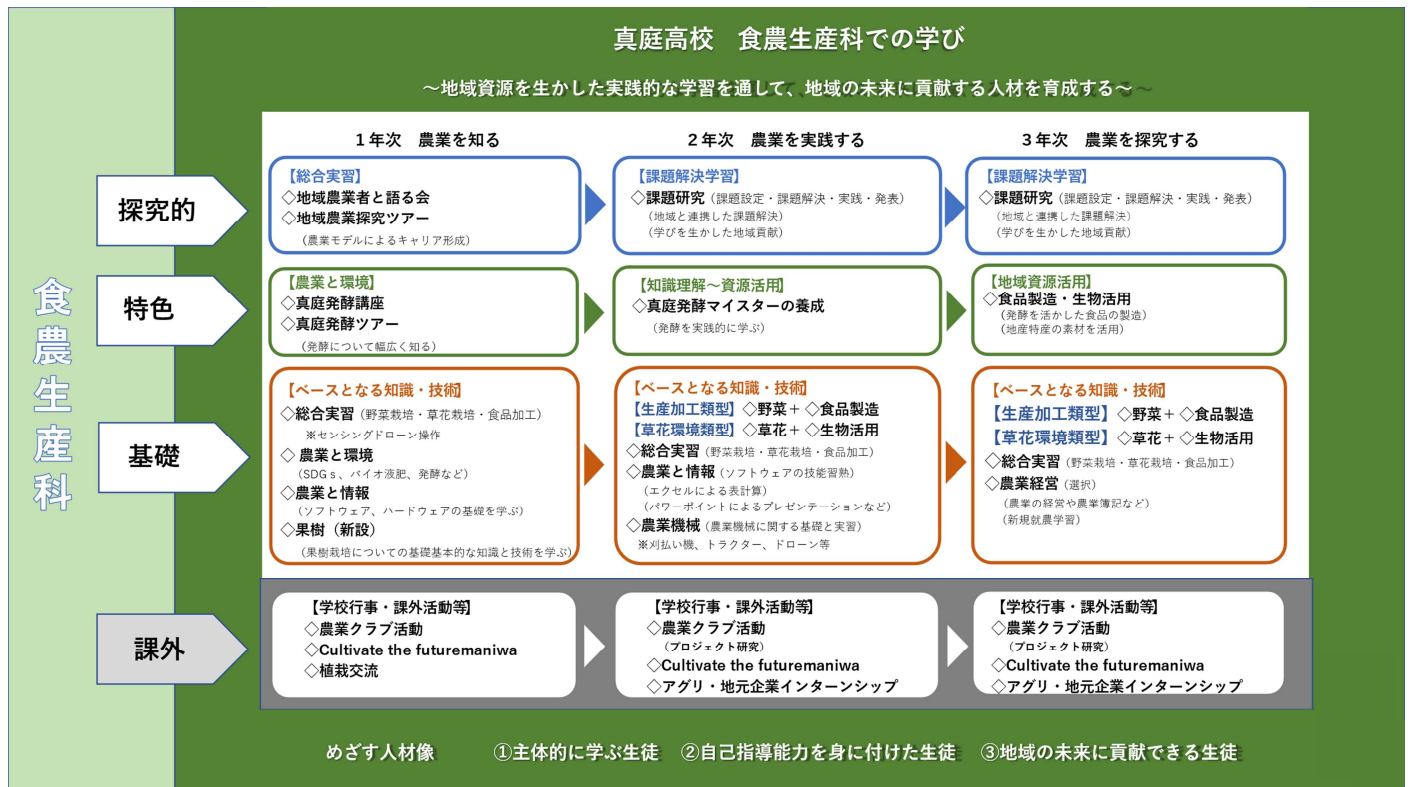
真庭型マイスター・ハイスchool事業の中心は地域と連携したカリキュラムの創造といっても過言ではなく、地域の力を生かしながら次世代を育成することが求められていると理解してきた。そういったことから、地域と連携した授業では、「真庭を学ぶ」「真庭で学ぶ」「真庭に学ぶ」など地域を学びに取り入れるインプットの学習と、「地域と共に学ぶ」「学んだことを地域へ生かす」など、アウトプットの学習を組み合わせることで、育てたい人材の育成に向けて効果的に取り組むことができると考えた。

■ 地域と連携した授業展開



6 地域産業学習カリキュラム

【食農生産科のカリキュラム整理表】



○産業実務家教員による木材・バイオマスに関係した課題研究

産業実務家教員が、木造でも高層建築を可能にするCLTについて授業を行った。課題研究ではCLTでベンチを制作し、バス停に設置した。多くの方にご利用いただき、やりがいを感じることができた。素材を体感し、制作するという体験を重視したインプット型の学習と、ベンチを制作し地域に設置するというアウトプット型の学習を組み合わせることで、求める人材育成に迫ろうとした。

CLT建材について学ぶ



素材を体感・素材を活かして CLTベンチをバス停に設置！



○探究活動からの展開

課題研究で飛鳥時代から続く伝統工芸の「組子」の研究に取り組んだことがきっかけで、地元企業の佐田建美社長から全国植樹祭で天皇皇后両陛下がお座りになる御座所の組子壁の共同制作のお声掛けがあり、生徒5人が立候補した。佐田建美は、ホテルオークラ東京（The Okura Tokyo）のメインロビーの装飾も手掛けた企業である。生徒は、髪の毛1、2本分の厚さにこだわる職人の感覚を、実際に体感することで、初めて伝統のすばらしさを実感した。薄い板を接着剤も使わずに組み上げるときの緊張感と完成したときの興奮を味わうことができた。

■ 真庭組子の伝承



課研2
地域に学ぶ
INPUT



5月には全国植樹祭のステージに設置され、その後は岡山桃太郎空港の発着ロビーに展示される予定である。組子を学んだことで、地域への誇りと自信をもった生徒は、県北11団体が参加するフォーラムで、地域活性化につながる取組として、この実践を発表した。その後、5人は組子のすばらしさと技をクラスに伝え、クラス全員で、地元の小学校2校に出前講座に出かけ、学びを大きく広げた。



○先進農家訪問

1年生が自動草刈り機やGPS搭載のトラクターなどが活躍する先進農家を訪問した。生徒は、作業の効率化だけでなく、農業が地域の景色をつくっていることも知ることができた。ドローン演習にも意欲をもって取り組み、岡山県立農業大学校の講義ではスマート農業のメリットだけでなく、デメリットについても学ぶことが出来た。

■ 先進農業を学ぶ

地域の農業を守りたい！

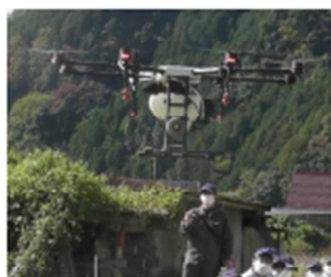
食農1
地域に学ぶ
INPUT



リモコン草刈り機操縦体験



GPS搭載トラクターに試乗



農業用ドローン実演見学



ドローン演習



農業大学校から外部講師

食農2・3
地域と
総合実習
OUTPUT

○発酵学習

真庭市は、酒、酢、味噌、醤油、発酵、チーズ等、伝統的な発酵文化とバイオ液肥やバイオ燃料などの先進の発酵まで盛んな地域である。真庭高校でも発酵学習やバイオ液肥の探究が始まった。今後、真庭の発酵を語れる生徒にしたいと「真庭発酵マイスター」の認定を考えている。

■ 発酵・バイオ液肥の学習

食農1
地域から学ぶ
INPUT



講師：酢味噌製造工場河野さん



発酵製造所の見学

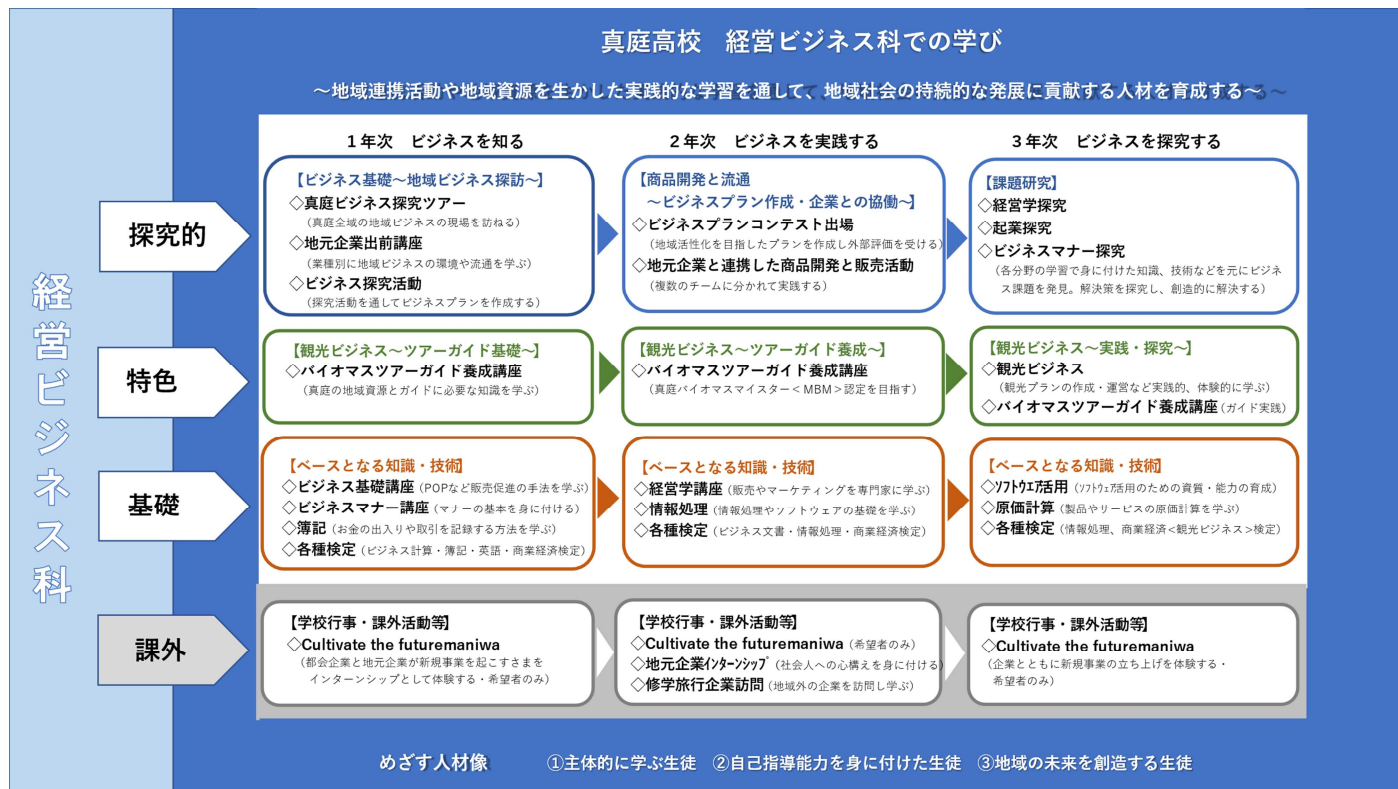
食農1
課題研究
INPUT



課題研究：臭わないバイオ液肥をつくりたい

食農2・3
地域に普及
OUTPUT

【経営ビジネス科のカリキュラム整理表】



○ビジネス探究ツアー

1年生は、ビジネス探究ツアーに出かける。郷育魅力化コーディネーターや地域協働活動推進員との協力で編成したコースは、単に施設を巡ることが目的ではなく、人に会い生き方を考えることを目的としている。ひるぜんワイナリーでは、自生する山葡萄でワインを作ろうと決意し、大学で学び直した社長や専務の話聞き、蒜山耕藝くどでは、ネットで販売すると商品がたった5分で完売するという、自然農の実践者である高谷ご夫妻の「自分たちが食べたいものしか作らない」という話や捨てないパン屋として全国に知られる田村さんの仕事に対する考え方を聞いた。湯原温泉八景の女将さんからは、一度廃業に追い込まれたホテルを二十代で任された人生ドラマやお客さんとともに年を重ねる宿でありたいと願う人間味あふれる話に心を打たれた。

■ 真庭ビジネス探究ツアー(北コース)

わたしたちの知らない真庭があった！

生き方を考える
人を学ぶ・仕事を学ぶ・地域を学ぶ



GREENable
HIRUZEN



ひるぜんワイナリー



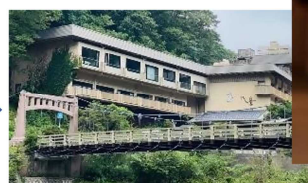
蒜山耕藝くど



捨てないパン屋 ドリアン



湯原温泉



湯原温泉 八景



南コースも実施した。廃校となった母校を複合施設として運営する芦田さん。特産のフルーツで地域を盛り上げる谷本さん。コミュニティをデザインする松尾さん、明治から続く老舗の岡本さん、河野さん。真庭を発信するあぐりガーデンの三村さん。みなさんの地域を想う話が、生徒たちの心に火をつけた。生徒のツアー後の感想には、自分たちも、地域のために力をつくしたいという思いがあふれ、手応えが感じられた。これらの学習において、担当者の意識や生徒の振り返りが重要だと感じられた。

■ 真庭ビジネス探究ツアー(南コース)

わたしたちの心に火がついた！

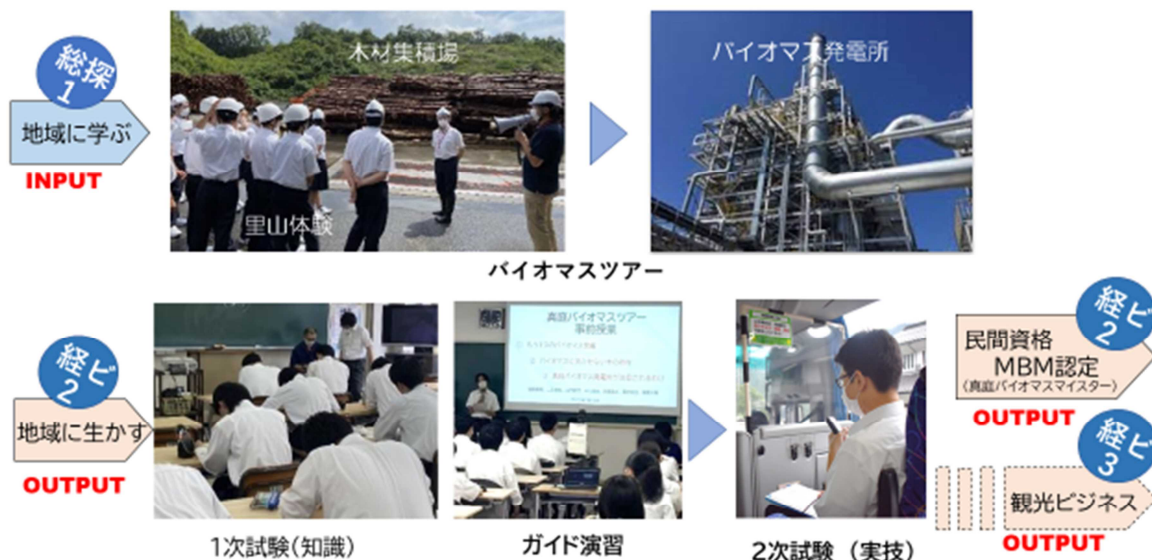


○ バイオマスツアーガイドの養成

地域を自分の言葉で語れる生徒にしたいと、産業実務家教員の協力を得て、バイオマスツアーガイドの養成を授業化した。ガイド養成と聞くと知識を詰め込む学習と思われがちだが、そうではなく、観光局のスタッフからお客様をガイドする上での失敗談や難しさ、逆に喜びや、やりがいも語ってもらい、お客様への目配り気配りも含めて学習する。ガイドの原稿も自分で作るのである。最初は消極的だった生徒も、ガイドをやり終えると、達成感を感じ、自信を持つことができた。

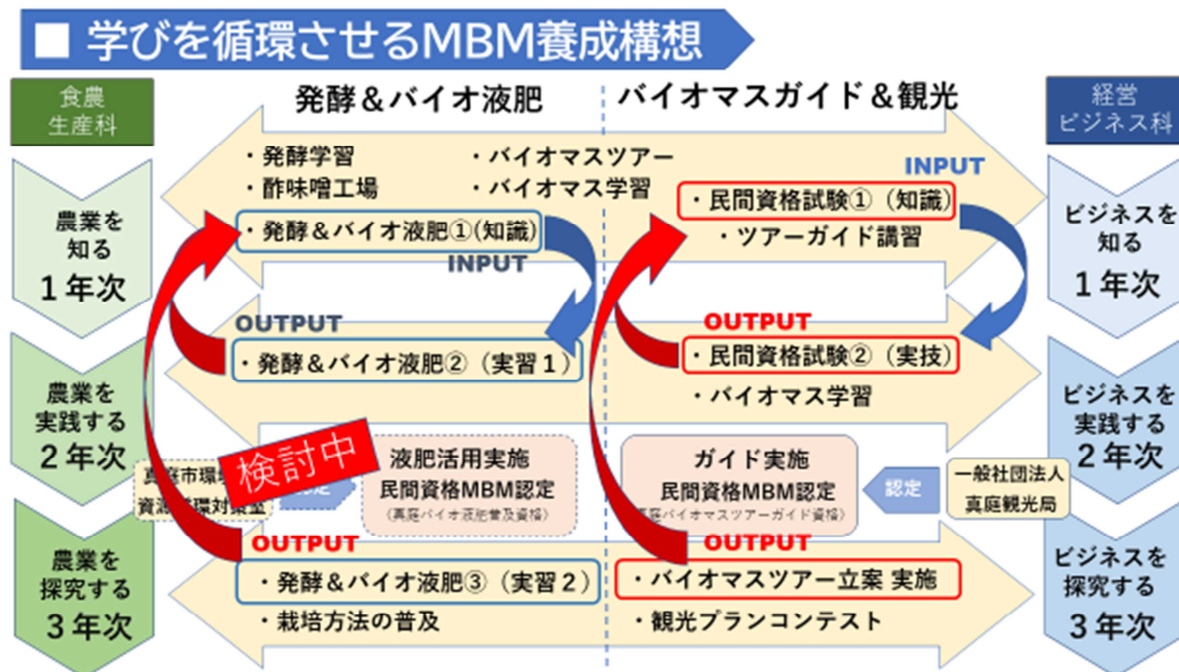
■ バイオマスツアーガイドの養成

地域を語れる人材に！



○バイオマスツアーガイドの養成構想

これは、真庭バイオマスマイスター、通称MBMの養成構想である。経営ビジネス科では、バイオマスツアーをガイドの養成や観光プランの学習につなげていくことになっている。認定を受けた上級生が下級生に向けてアウトプットすることで、学びが循環できるよう工夫している。また、地元敬老会や子供会のガイド等、実践の場を広げていきたいと考えている。食農生産科でも真庭の発酵やバイオ液肥の普及について、もう一つのMBM認定ができないか検討中である。



○地域と連携した商品開発

2年生では、地域資源を生かした商品開発にも取り組むが、生徒は、独りよがりな発想になりがちだった。そこで、真庭市産業政策課の平澤氏による、リサーチ講座を実施した。彼は元企業マンで広報・事業開発の最前線で活躍していた人物である。講座後には、生徒はアイディアを多角的に検討し、ブラッシュアップさせることができた。地元企業の方からもアドバイスをもらい、試作を重ね、商品化を目指している。現在、梨を使ったスムージーが完成している。

■ 地域と連携した商品開発

地域資源を活かして商品開発をしたい！



○産業界と連携した起業家教育

経営ビジネス科では岡山イノベーションコンテストに2年生全員が挑戦した。そのうち2チームが2次審査に進んだが、決勝には残れなかった。くじけず、再挑戦したいと意気込んでいる。課外活動で行われた、Cultivate the future maniwaは、新しいタイプのインターンシップである。食農生産科からも参加した。都市部企業と真庭市内の企業をマッチングさせ、0→1のアイデア創出から新規事業を立ち上げるまでを高校生が伴走し、プレゼン発表までを行う。新たな価値を見出す視点を持つことができ、起業のハードルが下がることを期待している。

■ 新たな価値の創造に向けて



岡山イノベーションコンテスト全員参加
7チーム中2チーム2次審査進出

地域に生かす

OUTPUT

経2
課外

食農
課外

地域で学ぶ

INPUT



Cultivate the future maniwa
都市部企業5社×真庭市内企業5社

プレゼン発表

OUTPUT

○キャリア教育計画

令和5年度は真庭高校普通科の最終年度であり、進路指導は進学指導主体の指導となっていた。しかし、現在2年生に在籍する専門科生徒の多くが就職・専門学校進学を希望しており、キャリア教育の充実が必要である。現在、学年進行に合わせてキャリア教育充実を図っている。その中では、マイスター・ハイスクール事業での取り組みや様々な体験を綴ったポートフォリオをもとにキャリアパスポートの作成を行い、地域産業学習を進路指導に結びつけている。

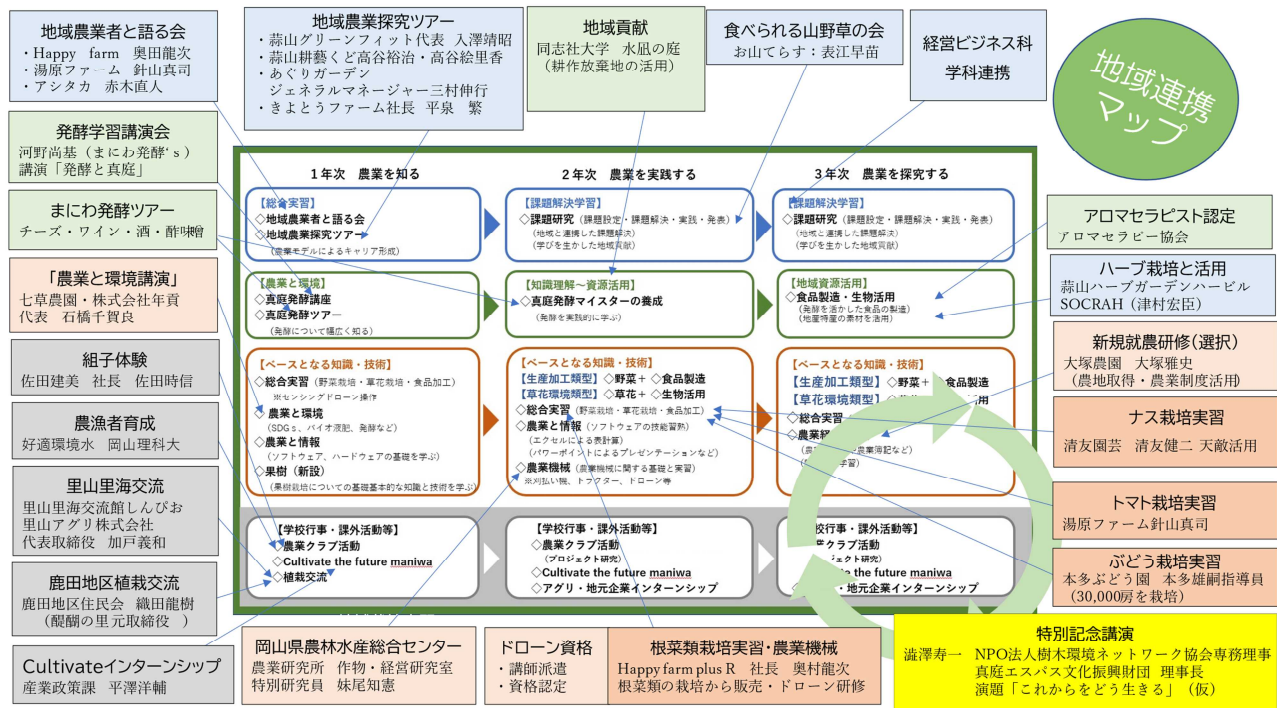
また、12月には真庭市産業政策課等の協力をいただき、地元企業11社の参加による「Maniwa Job Fair 2023」を開催し、進路学習を実施した。今後も地元企業等を中心としたキャリア教育を計画的に実施していき、地域の次世代を担う人材の育成を行っていく。



○地域企業等との連携

こういった場面でこういった企業等と連携することができるのか把握する必要があるが、CEO等が中心となって開拓した連携可能な地域企業等を、食農生産科・経営ビジネス科の3年間の学びの体系表に落とし込み、次表のとおり一覧性を高めた。

地域連携マップ（食農生産科）

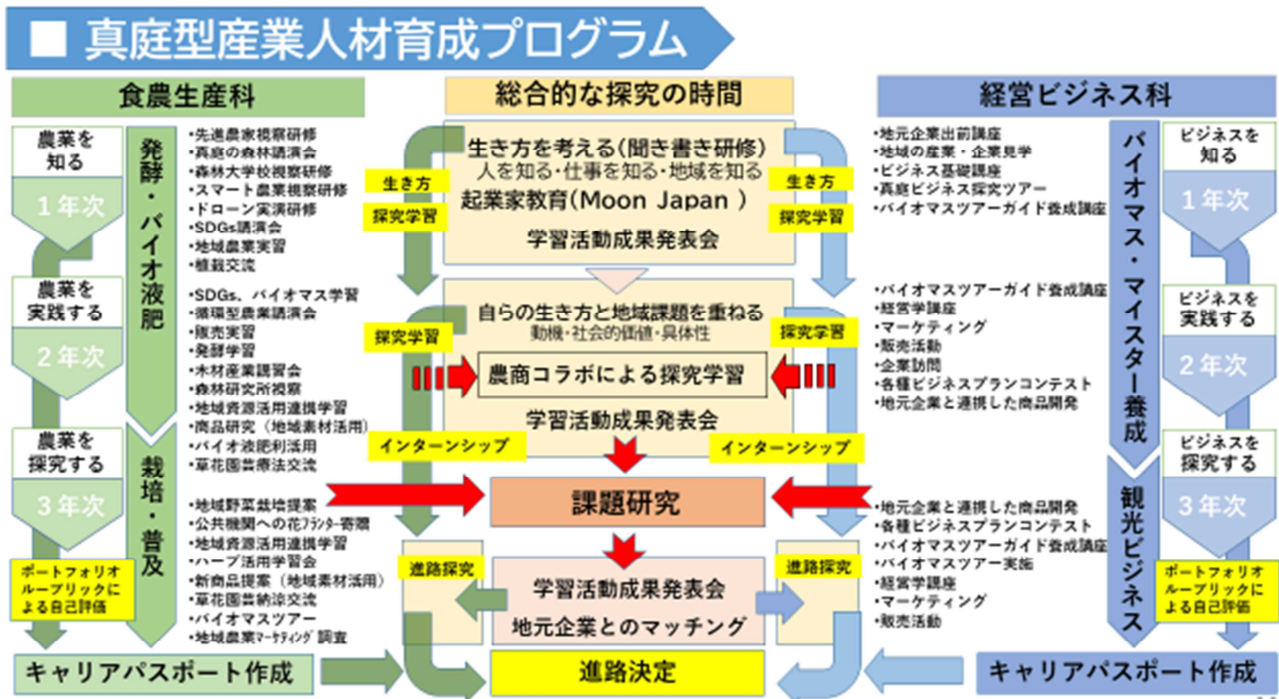


地域連携マップ（経営ビジネス科）



7 地域資源を活用した学習カリキュラム

真庭高校では、3年間の専門教科において次世代の地域の担い手育成と実践力の養成を目指し、「真庭型産業人材育成プログラム」をブラッシュアップしながら多くの地域連携学習を実施した。「真庭型産業人材育成プログラム」は、総合的な探究の時間「真庭トライ＆リポート（TR）」において探究学習の手法を身に付けることと、専門教科において実施する地域をフィールドとした地域連携学習の2本柱で構成している。



TRは、平成22年から普通科・看護科において実施してきた。令和4年度では、その流れを踏襲して実施したが、マイスター・ハイスクール事業推進委員会・運営委員会で「専門科のTRとすべき」の御意見をいただき、令和5年度は、専門科ごとにグループ編制・テーマ決定を行った。探究テーマは生徒の興味・関心により、専門科ならではのテーマで地域をフィールドとした探究活動が実施できた。しかし、事業当初から取り入れようと計画していた“聞き書き”に取り組むグループがなかったことは残念であった。年間を通して活動した成果は、令和6年2月3日(土)に学校及び近隣施設で行った成果発表会で、大学関係者3名・真庭市・地元関係者・県外高校・保護者等を招いて発表した。



食農生産科・経営ビジネス科の専門教科の学びは、8月のマイスター・ハイスクール事業推進委員会・運営委員会に3年間の取組案を示した。その後、真庭市・郷育魅力化コーディネーター等の協力のもと「学科での学び」をフローチャート化(前記6 地域産業学習カリキュラム)し、基本的な流れを作成し取り組んできた。

食農生産科では、1年次「農業を知る」、2年次「農業を実践」、3年次「農業を探究」というテーマで学習を進めている。令和5年度に実施した主な地域連携活動は次表のとおりである。

実施月日	行事名	場所	学年
5月21日	きたまちマルシェ	真庭市久世	2年
7月14日	バイオマスツアー	真庭市蒜山・久世	1年
9月24日～ 10月1日	落合まちかど展覧会	真庭市落合	
10月24日	みま咲未来フォーラム 2023	津山市	2年
11月1日	先進的農業経営者訪問研修	真庭市三崎・勝山・蒜山	1年
11月15日	地域貢献活動植栽交流会	真庭市鹿田	1年
11月24日	ハーブ活用学習会	真庭市蒜山	2年
12月11日	発酵に関する講演会	本校	1年
12月26日	高校生探究フォーラム 2023	岡山コンベンションセンター	2年
1月29日	小学校での出前授業（組子）	真庭市立河内小学校	2年
1月31日	地域企業見学	河野酢味噌製造工場	1年
2月1日	小学校での出前授業（組子）	真庭市立落合小学校	2年
3月中旬	ドローン講習会	本校	1年
3月18日	卒業式「花文字」の設置	真庭市立落合小学校	2年
通年	真庭組子研修	真庭市	2年

経営ビジネス科では、1年次「ビジネスを知る」、2年次「ビジネスを实践」、3年次「ビジネスを探究」というテーマで学習を進めている。令和5年度に実施した主な地域連携活動は次表のとおりである。

実施月日	行事名	場所	学年
7月14日	バイオマスツアー	真庭市蒜山・久世	1年
9月25日	真庭ビジネス探究ツアー（北コース）	真庭市蒜山・湯原	1年
11月3日	経営実践実習	道の駅醍醐の里	1年
11月21日	真庭ビジネス探究ツアー（南コース）	真庭市勝山・落合・北房・久世	1年
12月～3月	バイオマスツアーガイド養成講座	本校	1年
3月20日	経営実践実習	道の駅醍醐の里	1年
6月～7月	バイオマスツアーガイド養成講座	本校・真庭市蒜山・久世	2年
9月～10月	岡山イノベーションコンテスト	本校・岡山市	2年
通年	商品開発	本校	2年
10月～	Cultivate the future maniwa2023	真庭市役所他	2年

8 学校設定教科・科目の研究

真庭高校では、マイスター・ハイスクール事業を進めるに当たって念頭に置いたことは、「事業終了後も継続できる学び」の創出である。「継続性のある学び」を考えたときに、真庭高校独自の学校設定教科・科目の設定を行った場合、担当教員の負担の大きさや転勤等によって継続性が損なわれる恐れがあり、必ずしもよい結果が得られるとは考えにくかったため、現在の教育課程で設定している教科・科目内で実施可能かを検討した。

令和3年度からの事業展開の中で、各教科・科目に学習内容を設定して実施が可能かを検討した。その結果「授業内での実施が可能であり、学校設定教科・科目を設定するには及ばない」との結論を出した。

9 真庭市郷育魅力化コーディネーターとの連携活動

- ・保・幼・こども園及び小・中学校との連携活動については、学校独自に植栽交流等を実施した。さらに、真庭組子の制作活動を通して得た知識・技術を使って、小学校への出前授業を行った。真庭市郷育魅力化コーディネーターに小・中学校との連携をコーディネートしていただく機会が持てなかったが、近隣の小学校等との交流が持てた。
- ・聞き書きの手法の取り入れについては、令和5年度は実施できなかった。総合的な探究の時間を専門科としての内容にシフトしていこうとした際に、聞き書きを希望する生徒がいなかったことから実施ができず、大変残念であった。令和6年度では、1年生の総合的な探究の時間で取り組む方向で検討しており、真庭市郷育魅力化コーディネーターにも協力していただく計画としている。

10 活動を支援する体制の構築

真庭市は、県立高校の設置者ではないが、就学前から高校まで一貫して、地域みんなで子育てを応援する立場から、これまで市民総掛かりで高校生の学びを応援し、地元自治体としてできる範囲で、市内県立高校2校3校地（真庭高校・勝山高校・蒜山校地）の教育内容・環境の充実を通して特色を磨き上げ、魅力化の向上を図るべく取り組んできた。特に真庭高校については、本事業開始時点では次のような方策を通じ、高校の活動支援に寄与する計画であった。

- ①高校魅力化コンソーシアム推進本部（仮称）を置き、コンソーシアムを質・量共に拡充
- ②地域資源を活用したり、校種間連携を進めたりする高校の学習を支援
- ③高校との連携・協働や高校独自の取組を交流・発信するシンポジウムを開催
- ④高校の姿を市内外に知らせる情報発信や高校生の通学環境充実に支援

この4点に係る進捗・評価については、次のとおりである。

まず①についてであるが、市役所内では「教育魅力化プロジェクトチーム」を立ち上げ、全庁的に取り組む体制を整備した。これを端緒に様々な方面へつながりを広げていくような方策も探っていたところであるが、各校地との協議・意見交換や、進路実績等を考慮する中で、置かれた現状や抱える課題にはそれぞれ違いがあり、それらの違いに合わせた対応を取ることが適切と考えるに至っている。したがって、一律にコンソーシアムという形で組織化することは当面見送り、緩やかなつながりを維持しながら、それぞれの課題等を踏まえた人・財の直接支援や、地域連携に向けた側面支援を行いたいと考えている。

当面は、令和6年度から設置される学校運営協議会の運営を見守り、あるいは運営に関わるとともに、その他学校外から支える体制については、市としては学校の求めに応じて、学校が地域の支援者となつながら、地域との連携が円滑に進むような側面支援を引き続き行っていきたいと考えている。例えば、地域とつながり、教育プログラムをともに実践していけるコーディネーターの配置や、学校の実務担当者や場合によっては生徒と、地域の応援者とが意見・情報の交換等を行う合同会議の開催が考えられる。

以前、令和4年度には地域づくり団体の構成員でもある若手事業者らを交えた小規模な「合同会議」を月1回ペースで開催し、地域で支える体制を作っていくための検討を重ねてきたが、令和5年度は新しい教育課程の構築に注力したため合同会議を公務関係者のみで実施した。今後は、以前の方式を復活・発展させる方法を検討していきたい。

このような形を通じて学校運営方針を注視しつつ、将来的には市内全校地を支援するために意思ある団体・個人等の組織化を図ることを視野に入れていきたい。

また、地域との連携を進めるに当たっては、教職員が地元出身でないなど地元と強いつながりがない中

で連携の相手方を見つける必要があることから、学校からは誰がどんなことをできるのかという情報が欲しいという要望が早い段階で示されていたが、実現に至っていなかった。その中で、真庭高校と包括連携協定を結んだ同志社大学から、学校と地域を結ぶ協力の申し出があり、会議を経てコミュニティ・アプリ（仮称）開発の協力をしていただけることとなった。このアプリは、連携をめぐる関係者が登録することにより双方向で意思疎通ができるツールとして期待されている。

学校・市教委・地域とのつながりの確保には前述の合同会議の活用や、コミュニティ・アプリとの両輪で継続することが考えられる。

次に②についてであるが、地域資源の活用については、マイスター・ハイスクールCEOによる連携先の開拓や地元企業から派遣された産業実務家教員による授業の実施、さらには郷育魅力化コーディネーターによる探究的な学習の時間へのサポート等の人的支援とともに、地域から校内へ人材を招いたり、学校から地域へ学びに出て行く移動経費を確保したりするなど、地域連携に係るコストを負担する財政的支援を通じて、地域資源を活用した学習を行うことができた。

校種間連携については、高校の尽力により小学校と植栽交流、木工体験や課題研究で地域企業に出向いたことに端を発した組子作成などの交流事業を実施することができたが、市立中学校との関わり方については、引き続き検討・改善の余地があると考えている。

新たな取組としては、学校間交流として別の市内高校のバイオマスツアーで、真庭高校のMBM生徒がガイド又は事前授業を実施することができた。

さらに③についてであるが、令和3年度に高校魅力化シンポジウムを開催し、保護者、中学生、教員、地元産業界等に幅広く高校の魅力と地域への必要性について意識の共有・向上を図った。YouTube ライブやその後のアーカイブでの視聴も合わせ1,300回再生を超えるなど市民意識の向上に一定の効果を得られたと考えている。また、ワークショップも開催し、中学生と高校生をZoomでつなぎ高校での学習内容について意見交換をするなど、生徒が主体的に高校の魅力について語る場を作ることができた。

最後に④についてであるが、情報発信については広報素材（HP構築、学校紹介パンフレット等）への財政的支援、地元ケーブルテレビの番組への生徒出演、市広報紙（広報まにわ）での特集、市ホームページ（VIVA まにわ）での紹介、市内小中学校・保護者が使用するアプリ（コドモン）への学校広報紙配信などの取組を行った。広報戦略については学校の協力が得られればより効果的な方策を提案したり、ともに検討したりしていきたいと考えている。

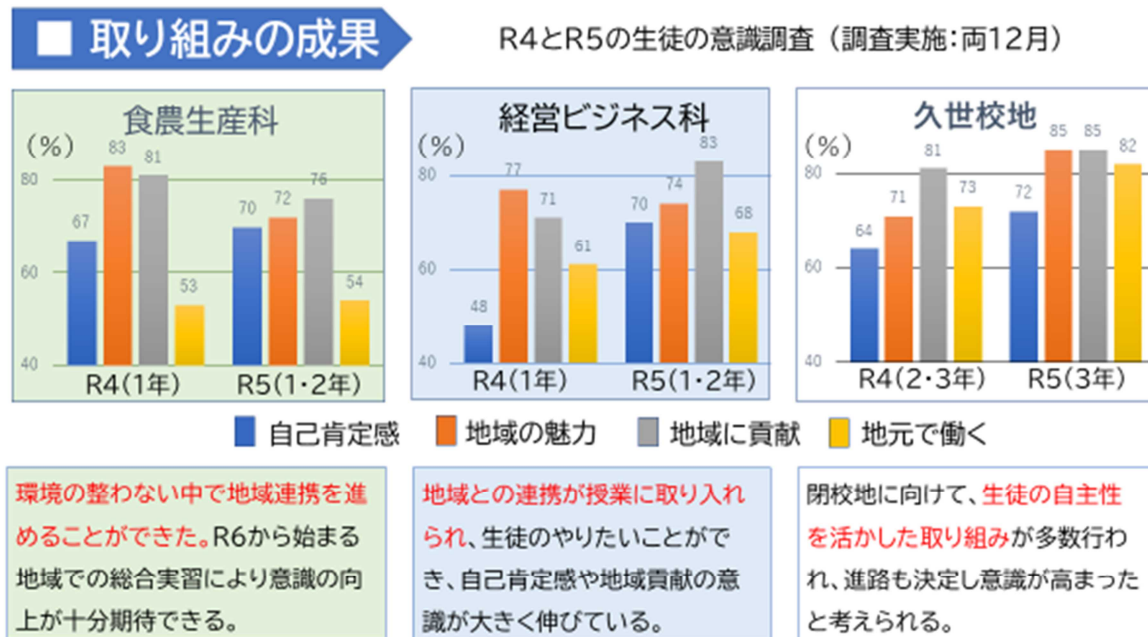
通学環境充実については、市内高校への通学手段としてコミュニティバスまにわくんを2路線以上乗り継いで利用する場合に、一乗車運賃（200円）で乗車できる特例措置を実施している。令和5年度で32名が利用登録しており、通学負担の軽減に寄与している。

このように、事業開始後の状況認識、情勢変化等により当初計画から変質しつつある取組もあるが、今後も高校魅力化向上への支援を行う姿勢に変わりはなく、情勢に応じてブラッシュアップしながら柔軟に対応していきたいと考えている。

11 取り組みの成果

取り組みの成果として、生徒の変容の状況をアンケートに基づいて考察した。考察に当たっては4つの観点について生徒の肯定的な割合を比較した。（どちらも12月末の調査結果で、3学期の取組を反映しておらず、在籍の関係で母数は異なる。）

食農生産科では、2観点を下げており、環境整備に追われ、授業における地域連携の遅れが現れた結果となった。しかし、令和6年度からは、地域での総合実習が展開できるようになり、生徒の意識は向上させることができると見込んでいる。経営ビジネス科では地域との連携を授業に積極的に取り入れることで、自己肯定感や地域への貢献意識が大きく伸びている。地域の人々の生き方にふれる体験が有効だったと思われる。久世校地では、閉舎に向け、生徒の自主的な活動を増やすことで、生徒の意識が大きく伸びており、今後の参考となる。



12 課題と今後の取り組み

■ 課題と今後の取り組み

【人的・組織的課題⇒取組】

- 専門科目だけの改革にしない ⇒ 全職員の意識改革・リーダーシップ
- 校内推進と支援組織の整理 ⇒ 校内体制整備・学校運営協議会に一本化

【授業課題⇒取組】

- 地域との対話を起点とした授業実践 ⇒ 地域と語る会等の実施
(郷育魅力化コーディネーターの活用)
- 振り返りの充実 ⇒ 「聞き書き」の積極的導入
- 学科連携 ⇒ 総合的な探究の時間や課題研究での連携

【地域連携課題⇒取組】

- 地域・産業界との情報共有 ⇒ コミュニティアプリの制作(同志社大学)
- 産業界と連携した総合実習 ⇒ 最新技術と資格取得
(Happy Farm plus Rとの連携)
- 産業界と連携した食品加工 ⇒ あぐりガーデンとの連携

令和５年度は、事業指定最終年度であった。令和６年度は新学科の完成年度となると同時に全面的に専門高校化され、３年次のカリキュラムが実施に移される。これまでの取組から組織・授業・地域連携上の課題を挙げ、それに対する今後の取り組みをまとめた。

生徒獲得が高校存続のカギであり、校内の意思決定には、スピード感が求められる。特に全てに影響する、教職員の意識改革と校内の推進体制の整備は重要であり、自走のための推進体制を構築する準備を進め実行していく。また、専門教科の学びについて、さらに地域と結びついた内容を充実させていく計画である。

（１）自走に向けた課題と方向性【人的・組織的課題⇒取組】

●校内推進と支援組織の整理 ⇒ 校内体制整備・学校運営協議会に一本化

事業期間中は運営委員会と事業推進委員会が事業推進の軸となり、ＣＥＯを旗振り役として進めてきたところであるが、事業期間内に全てが完成したわけではなく道半ばである中、事業を継続し、あるいは事業そのものでないとしてもその考え方を学校運営に反映させていくために、事業期間終了後にその機能をどこに求めるのかは課題の一つであった。

市教委としては、まずは、マイスター・ハイスクールの考え方を学校運営方針に反映させる手段として、令和６年度から真庭高校にも設置される予定の学校運営協議会への継承を提唱した。

また、マイスター・ハイスクールや地域連携の考え方を確実に反映させる観点から、協議会の委員構成についても提言を行った。

さらに、学校運営協議会を実働部隊として運用することは事実上困難なため、実働部隊として、学校内の体制と学校外から支える体制の両面が必要だと考えている。

●専門科目だけの改革にしない ⇒ 全教職員の意識改革・管理職のリーダーシップ

学校内の体制は、校内の隅々までその方針が徹底し、教職員が一致して目的達成に邁進できるよう、しっかり整える必要がある。令和６年度は各学科の完成年度であり、所定の教員数が配置される見込みであり、その面での不安は解消される。

しかし、特に進学、就職にかかわらず卒業後の進路という出口を見据えたキャリア教育という観点から考えると、本事業の目指してきたところはこれまで中心に関わってきた管理職や専門教科の教員だけの問題ではなく、進路指導担当教員や、普通教科教員、看護科教員等の心の持ち方、取組も重要であると考えている。本事業期間中に蓄積したノウハウを基に、これらの教職員も含め学校全体として主体的に関わる環境づくりに取り組んでいきたい。そのためには、管理職のリーダーシップや、旧管理機関（市教委・県教委）との対話も肝要と考えている。

（２）カリキュラムに関する課題と方向性【授業課題⇒取組】

●地域との対話を起点とした授業実践 ⇒ 地域と語る会等の実施（郷育魅力化コーディネーターの活用）

現行は、地域からの依頼や校内での情報提供により、教員側で選択肢を用意し、その中から生徒が選び、活動に入っていくという形態が多い。ＴＲのテーマ設定、課題研究、ボランティア等においてその傾向が見られる。これには授業時間数や教員のマンパワーの問題などやむを得ない事情があることは理解できるが、一方で、地域からは０→１の時点で生徒と関わりを持ち、課題の発見から協働したいという声もある。この０→１からの関わりは、起業精神の涵養や生徒たちが新たな価値を見出す視点を持つことができるなど有益な取組という意見もある。

このように依頼による受け身の活動だけではなく、生徒が地域と語り合う中で、課題を見つけ解決

へのアクションを起こすという展開ができるよう、その障壁を取り除くなど方策を検討する必要がある。

●振り返りの充実 ⇒ 「聞き書き」の積極的導入

「聞き書き」の取組については、継続的に人に会い、話を聞き、文章にしたためることで自らの生き方、働き方を考えるに当たり大変有効とされているが、令和5年度においては「聞き書き」に長けた郷育魅力化コーディネーターの派遣準備を行い、総合的な探究の時間を活用して行うメニューの一つに位置付けられていたものの、十分な取組に至らなかった。「聞き書き」の有効性を教職員に理解してもらう取組等も含め、引き続き検討していきたい。

●学科連携 ⇒ 総合的な探究の時間や課題研究での連携

学科連携については、当初は学校設定教科・科目の設定も視野に入れた検討を行ってきたが、令和5年度は、事業推進委員でもあるCEOや郷育魅力化コーディネーターの助力を得て、管理機関や担当教員で構成した合同会議・担当者会議で検討作業を行い、まずは学科の教育内容をしっかり足固めし、特色を見出すことに注力した。その結果、当面は学校設定教科・科目の設定はせずとも、TRや課題研究の時間を使って学科連携の取組を行うことができ、それを特色として打ち出せるという考えに至った。

取組は、食農生産科による生産物を、経営ビジネス科による商品開発やビジネスプランにつなげていくような方法で可能性が考えられるが、具体は引き続きの検討課題である。状況によっては、将来的に学校設定教科・科目設定の可能性はあるものと考えている。

(3) 地域との連携に関する課題と方向性【地域連携課題⇒取組】

●地域・産業界との情報共有 ⇒ コミュニティ・アプリ（仮称）の制作（同志社大学）

地域の教育資源を活用するといっても、教職員が地元出身でないなど地元と強いつながりがない中で連携の相手方を見つける必要があることから、学校からは誰がどんなことをできるのかという情報が欲しいという要望が早い段階で示されていたが、実現に至っていなかった。その中で、真庭高校と包括連携協定を結んだ同志社大学から、コミュニティ・アプリ（仮称）開発の協力申し出があった。このアプリは、連携をめぐる関係者が登録することにより双方向で意思疎通ができるツールとして期待されている。

その他学校外から支える体制については、市としては学校の求めに応じて、学校が地域の支援者となつたり、地域との連携が円滑に進むような側面支援を引き続き行っていきたいと考えている。例えば、地域とつながり、教育プログラムをともに実践していけるコーディネーターの配置や、学校の実務担当者や場合によっては生徒と、地域の応援者などが意見・情報の交換等を行う合同会議の開催を検討している。

学校と市教委間、あるいはそれに加えて地域とのつながりの確保にはこの合同会議の活用や、コミュニティ・アプリとの両輪で継続することが考えられる。

●産業界と連携した総合的な実習 ⇒ 最新技術と資格取得（Happy Farm plus Rとの連携）

真庭高校の場合、学科改編に伴い専門科高校に衣替えするに際し、校地統合というもう一つの特異な事情があり、前身が農業科専門高校であった久世校地と比べ、農業系学科が新設された落合校地では農業実習地や実習棟、実習機器等農業実習に係る施設設備の規模・能力等は大幅に縮小することとなった。

このように施設設備面に制約が生じる中では、これまでの校内で全てが完結する学び方ではなく、地域へ出て、地域の教育資源を活用しながら学びを進めることが必須であった。

そこで農業実習地については民間事業者の施設を使用させてもらい、生徒側は大規模農場での総合実習を経験したり、ドローンなどの各種資格取得が可能となったり、また事業者側は生産物の売払いとともに、将来的には商品開発につなげられる可能性があるなど、事業者と学校との双方に意義のある取組と認識しており、積極的に進める意思がある。とはいえ、民間施設の使用に当たっては費用負担の問題などクリアすべき課題もあり引き続き調整を図っている。

なお、真庭型マイスター・ハイスクールは特定の企業等をパートナーとするのではなく、地域から人材を招き、地域へ出て学ぶことが特色の一つであり、自走に当たっては自ずから財政面の課題が生じる。これについては現時点では県費だけではなく市費による支援で実施できる要素が大きい、自走による収支の均衡を目指し、実習経費（県費）の取扱いなど引き続き検討すべき課題があると考えている。

●産業界と連携した食品加工 ⇒ あぐりガーデン等との連携

上記の施設設備面の制約は食品加工にも影響しており、校内の実習室で加工生産した食品類については販売の許可が下りないこととされている。このことから、食品加工についても地域の関係企業の協力を得ながら行い、販売は校内や地域の拠点、イベント等で行うという枠組みが現実的である。

協力の申し出がなされている業者もあるが、具体的な連携には至っておらず、引き続き取り組む必要がある。

岡山県立真庭高等学校

〒719-3144

岡山県真庭市落合垂水448-1

TEL (0867) 52-0056

FAX (0867) 52-0936

<https://www.maniwa.okayama-c.ed.jp/>

岡山県真庭市教育委員会

(教育総務課)

〒719-3292

岡山県真庭市久世2927-2

TEL (0867) 42-1085

FAX (0867) 42-1416

<https://www.city.maniwa.lg.jp>

<https://viva.maniwa.city>

(遊びと学びの場づくり応援サイト VIVA まにわ)

岡山県教育委員会

(高校教育課高校魅力化推進室)

〒700-8570

岡山県岡山市北区内山下2-4-6

TEL (086) 226-7825

FAX (086) 224-2535

<https://www.pref.okayama.jp/soshiki/348/>